Ⅱ-7

大臣や大学教授のどこが偉い？ー言葉と生きた Pentti Saarikoski

『フィンランド語の世界を読む』24 課で 1950 年代から 1960 年代における文学について考えました。そこでは「フィンランドとは何か」「真実とは何か」が問われることになりましたが、その時代を代表する詩人・作家が Pentti Saarikoski（1937-1983）です。そして Saarikoski は Oodi 図書館の taidematto のテーマにもなっています。この資料では彼の詩ではなく、彼の翻訳が巻き起こした議論について見ていくことにします（彼はアーサー・ミラーの『北回帰線』や J.D.サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』などをフィンランド語に翻訳しています）。また、これらの問題と関連して kirjasota「本戦争、文学戦争」という重要な現象についても触れていきます。

それでは、まず戦後の状況から始めて、1960 年代の様子を簡単に見ていきます。

【1】戦後文学の二つの特徴とは

Sodanjälkeiselle kirjallisuudelle Suomessa oli pitkään ominaista kaksi seikkaa: taiteellisten ilmaisukeinojen uudistuminen ja tilinteko lähimenneisyyden kanssa. Tyylin murros näkyi selvimmin lyriikassa, menneisyyden uudelleenarviointi proosassa.

■語句・文法

ominainen「特徴的な／uudistuminen「新しくなること、刷新」動名 < uudistua < uudistaa < uusi／tilin-teko「決算、清算、決着」／murros「転換、変化」／selvimmin「もっとも明確に」［副］最 < selvä／lyriikka「叙情詩」／uudelleen-arviointi「再評価」（arviointi < arvioida < arvio < arvata）／proosa「散文」

●フィンランド語理解のための訳例

戦後の文学にとって｜フィンランドにおける｜長い間特徴的だった｜二つの事柄が：｜芸術的な表現方法の刷新｜そして近い過去の清算。様式の変化は見えた｜もっとも明確に｜叙情詩において、｜過去の再評価は〈見えた〉｜散文において。

◎意訳

戦後のフィンランド文学にとっては、長い間二つの事柄が特徴的なものとなっていた：一つは芸術的表現方法の刷新であり、もう一つは近い過去を清算することだった。様式の変化は叙情詩においてもっとも明確に見られたのに対し、過去の再評価がもっとも明確に見られたのは散文においてであった。

【2】さらに新しい変革の時が

Uusi vaihe alkoi silloin kun maa oli vakiintunut rauhan kauteen ja päässyt taloudellisen nousun makuun. Kun uusi nopeasti leviävä ja toimiva tiedotusväline, televisio, oli tuonut maailman tapahtumat ja kriisit lähes kaikkien ulottuville, huomio alkoi voimakkaana kohdistua oman ajankohdan ongelmiin, havaittiin, että Suomi ei enää ollutkaan eristynyt syrjäinen takamaa, vaan osa maailmaa. Samalla alkoi esiin nousta sukupolvi, jolla ei enää ollut omakohtaisia kokemuksia sodasta.

■語句・文法

vakiintua「定着する」／kauteen「時期へ」［入］< kausi／makuun「味へ」［入］< maku（päästä makuun「経験する、味わう」）／leviävä「広がるような」能現分 < levitä／toimiva「機能するような」能現分 < toimia／tiedotus-väline「マス・メディア、媒体」／ulottuville「届くところへ、近くへ」［複向］< ulottuva 能現分 < ulottua ⇒ ulottuvilla, ulottuvilta／voimakkaana「強く」［様］< voimakas < voima／kohdistua「向けられる」< kohdistaa < kohde／havaittiin「気づかれた」受過< havaita／eristynyt「孤立したような」能過分 < eristyä < eristää < eri／syrjäinen「辺境の」／taka-maa「奥地、へき地」／nousta esiin「現れる、表面化する」／oma-kohtainen「個人的な、直接的な」

●フィンランド語理解のための訳例

〈変革が求められるような〉新しい段階は始まった｜〈次のような〉［ときに｜国には定着していた｜平和の時代へ｜そして経済的成長を味わっていた］。〈次の〉［ときに｜新しい｜速く広がるような｜そして機能するようなマス・メディア、テレビは、｜もたらしていた｜世界のできごとや危機を｜ほぼすべての人の届くところへ］、［注意は強く向けられ始めた｜自らの時代の問題へ］、｜気づいた、｜〈次のような〉［ことに｜フィンランドはもはや～ではない｜孤立した辺境のへき地、｜〈そうではなく〉世界の一部である］。同時に現れ始めた｜世代が、｜［それにはもはやない｜個人的な経験は｜戦争について］。

◎意訳

変革が求められる新しい段階は、フィンランドが平和な時代に落ち着き、経済成長を経験したときに始まった。急速に普及した新しく効果的なメディアであるテレビは、世界のできごとや危機をほとんどすべての人の手の届くところにもたらすこととなった。その結果、自らの時代の問題に強い関心が向けられるようになると、フィンランドはもはや孤立した辺境のへき地ではなく、世界の一部であることに気づくようになった。同時に、もはや直接的な戦争体験をもたない世代が現れ始めた。

★補足

戦後において社会や文学の世界において大きな変化があったことは理解しやすいことだと思いますが、さらに社会全体が政治的にも経済的にも落ち着いてきた 1960 年代に、フィンランド社会や文学は大きな転換点を迎えることになったようです。その中で注目を集めるようになったのが Pentti Saarikoski です。

【3】まず反応したのはやはり叙事詩

Kuten sodan jälkeen, nytkin tilanteeseen reagoi ensinnä lyriikka. Taitekohtana nähdään tavallisesti vuosi 1962, jolloin Pentti Saarikoski julkaisi runokokoelmansa *Mitä tapahtuu todella?* Siinä hän oli luopunut 1950-luvun lyriikan viimeistellyistä, sanojen vivahteilla ja merkitysaineksilla pelaavasta kuvakielestä ja siirtynyt avoimeen, puhekieliseen runoon, johon oli sulatettu sanomalehtien otsikkoja, kadulla kuultuja repliikkejä, keskeneräisiä tokaisuja ja ennen muuta avoimia poliittisia kannanottoja.

■語句・文法

tilanteeseen「状況へ」[入]< tilanne < tila／reagoida「反応する」／taite-kohtana「転換点として」[様]< -kohta／julkaista「公表する、出版する」／runo-kokoelmansa「自らの詩集を」[属対]+ 単3 所接 < -kokoelma < koota／luopua「捨てる、あきらめる」(+[出])／viimeistellyistä「完成されたような、仕上げられたような」[複出]< viimeistelty 受過分 < viimeistellä < viimeistää < viimeinen／vivahteilla「ニュアンスにより」[複接]< vivahde < vivahtaa／merkitys-aineksilla「意味要素により」[複接]< -aines < aine／pelaavasta「遊ぶような」[出]< pelaava 能現分 < pelata／kuva-kieli「比喩的言語、比喩的表現」／oli sulatettu「熔かされていた」受過完< sulattaa < sulaa／kuultuja「聞かれたような」[複分]< kuultu 受過分 < kuulla／repliikkejä「セリフを」[複分]< repliikki／kesken-eräisiä「途中の、未完成の」[複分]< -eräinen／tokaisuja「発話を、発言を」[複分]< tokaisu < tokaista／kannan-ottoja「意見表明を、主張を」[複分]< -otto (kannan[属]< kanta、otto < ottaa、ottaa kantaa「意見を表明する、立場を明確にする」)

●フィンランド語理解のための訳例

戦後のように、|今も状況に反応した|ます叙事詩が。転換点として見られる|ふつう|1962 年が、|そのときに Pentti Saarikoski が公表した|自らの詩集を|*Mitä tapahtuu todella?*『本当は何が起こっているのか』。その中で|彼は[捨てていた|1950 年代の叙事詩の|完成された、|語のニュアンスで|そして意味要素で|遊ぶような比喩的言語を]|そして|[移っていた|開かれた、|話し言葉による詩へ]、|[そこへは溶かされていた|新聞の見出しが、|通りで聞こえてくるセリフが、|未完成な発言が|そして何よりも|開かれた政治的な意見表明が]。

◎意訳

戦後と同様に、この 1960 年代の状況にもまず反応したのは叙情詩だった。転換点となったと考えられているのは 1962 年であり、同年には Pentti Saarikoski が詩集 *Mitä tapahtuu todella?*『本当は何が起こっているのか』を出版した。作品の中で彼は、1950 年の叙情詩がもっていた洗練された、そして言葉のニュアンスや意味要素で戯れるような比喩的表現を捨て、開かれた口語詩へと移行していた。その詩の中には新聞の見出しや通りで聞こえてくるセリフ、尻切れトンボの発言、そして何よりも政治的な意見表明が溶けあわされていた。

【4】1960 年代のおける叙事詩の語り手に求められたものは何か？

60-luvun lyyrinen minä liikkuu maailmassa, jonka tapahtumat melkein peittävät hänet alleen. Ne tulivat hänen yksityiseen elämäänsä mainoksina, lehtiotsikoina ja radio- ja tv-uutisina. Niiden keskellä hänen on elettävä ja etsittävä oma paikkansa. Uuden todellisuushakuisen lyriikan merkkiteos oli Pentti Saarikosken *Mitä tapahtuu todella?*, joka ilmestyi 1962.

■語句・文法

lyyrinen「叙事詩の」／minä「（詩の語り手としての）私」／peittää「覆う」／mainoksina「広告として」［複様］< mainos ⇒ mainita／lehti-otsikoina「新聞の見出しとして」［複様］< -otsikko < otsa／on elettävä ja etsittävä「生きなければならない、そして捜さなければならない」（elettävä 受現分 < elää、etsittävä 受現分 < etsiä）／todellisuus-hakuinen「真実をめざすような、真実を求めるような」（hakuinen < haku < hakea）／merkki-teos「重要な作品、注目すべき作品」

●フィンランド語理解のための訳例

60 年代の叙情詩の「私」は動く｜［世界で、｜そのできごとはほとんど覆う｜「私」を｜下へ］。それらは来た｜「私」の個人的な生活の中へ｜広告として、｜新聞の見出しとして｜そしてラジオやテレビのニュースとして。それらの真ん中で｜「私」は生きなければない｜そして捜さなければならない｜自分の場所を。新しい｜真実を求めようとする叙情詩の｜重要な作品は｜Pentti Saarikoski の *Mitä tapahtuu todella?*『本当は何が起こっているのか』だった、｜それは 1962 年に現れた。

◎意訳

1960 年代における叙情詩の語り手である「私」は、できごとが自分を覆いつくしてしまうような世界で動いていた。それらは広告や新聞の見出し、あるいはラジオやテレビのニュースとして「私」の私生活に入り込んできた。それらに取り囲まれた中で「私」は生き、そして自分の居場所を見つけなければならなかった。真実を求めようとする新しい叙情詩の注目すべき作品が、1962 年に出版された Pentti Saarikoski の *Mitä tapahtuu todella?*『本当は何が起こっているのか』だった。

【5】Saarikoski の表現様式は民主性を表している

Oman ilmaisutapansa Saarikoski nimesi dialektiseksi tyyliksi. Sille on ominaista eritasoisen kollaasiaineiston käyttö. Saarikoski lainaa yhtä lailla bussissa kuultuja puheita kuin uutisotsikoita, valtiomiehiä ja tunnettuja kirjailijoita. Korkeakirjallisen ja arkipäiväisen aineksen yhdistely ilmaisee runon demokraattisuuden.

■語句・文法

ilmaisu-tapansa「自らの表現方法を」［属対］+ 単 3 所接 < -tapa／dialektiseksi tyyliksi「弁証法的様式だと」［変］< dialektinen tyyli（Saarikoski のいう「弁証法的様式」あるいは「弁証法的詩」というのは、簡単にいえば、新聞の見出しや通りで耳にした発言などを組み合わせたり、あるいは貼り付けたりすることを意味するようで、モンタージュ技法やコラージュ技法と呼ばれることがあるそうです。

そのようにさまざまなものを組み合わせ貼り付けることにより、より深いものを見出そうとする様式だといえます）。／eri-tasoinen「さまざまなレベルの」／kollaasi-aineisto「コラージュの材料」／yhtä lailla「同じように、同様に」／valtio-miehiä「政治家たち（の言葉）を」［複分］< -mies／tunnettuja「有名な」［複分］< tunnettu 受過分 < tuntea／korkea-kirjallinen「高尚な文学の」／arki-päiväinen「日常の」／aines「題材」< aine／yhdistely「組み合わせること」< yhdistellä < yhdistää < yksi／demokraattisuuden「民主性を」［属対］< demokraattisuus < demokraattinen

●フィンランド語理解のための訳例

自らの表現方法を｜Saarikoski は名づけた｜弁証法的様式だと。それには特徴的だ｜さまざまなレベルの｜コラージュの材料の｜使用が。Saarikoski は借りた｜同様に｜バスの中で聞こえた発言を｜〈次のもの〉［と｜ニュースの見出しを、政治家たち〈の発言〉を｜そして有名な作家たち〈の発言〉を］。高尚な文学の｜そして日常の｜題材を組み合わせることは｜表現する｜詩の民主性を。

◎意訳

自らの表現方法を Saarikoski は弁証法的な様式と名づけた。それに特徴的なことは、さまざまなレベルのコラージュの材料を利用することである。Saarikoski はニュースの見出しや政治家たちの発言、そして著名な作家たちの言葉と同様にバスで耳にするような発言をも自らの詩の中で引用している。高尚な文学的な題材と日常的な題材とを組み合わせることが、Saarikoski の詩がもつ民主性といったものを表現している。

【6】Saarikoski はその時代においてもっとも多彩な作家

Ikäpolvensa runoilijoista Saarikoski on ollut laaja-alaisin: älykäs, levoton, tiedokas, aluksi itsetietoinen mutta samalla itsekriittinen kansainvälisen ajan kasvatti.

■語句・文法

ikä-polvensa「自らの世代の」［属］+ 単 3 所接 < -polvi（ikä-polvi = suku-polvi）／laaja-alaisin「もっとも範囲が広い、もっとも多彩な」最 < -alainen／älykäs「知能の高い、賢い」< äly／levoton「落ち着きのない、感情の起伏の激しい」< lepo／tiedokas「博識の」< tieto < tietää／itse-tietoinen「自信のある」／itse-kriittinen「自己批判的な」／kasvatti「育てられる者、申し子、子ども」< kasvattaa < kasvaa

●フィンランド語理解のための訳例

自らの世代の詩人たちのうちで｜Saarikoski はもっとも多彩だった｜：知的で、感情の起伏が激しく、博識で、｜最初は自信に満ち｜しかし同時に自己批判的であるような｜国際的な時代の申し子。

◎意訳

同世代の詩人たちの中で Saarikoski はもっとも多彩な人物だった：知的であり、感情の起伏が激しく、当初は自信に満ち溢れていたが、しかし同時に自己批判的でもあるような、国際化する時代の申し子だった。

★補足

以上で見たように1960年代の、とくに詩の世界を革新しようとしたのがPentti Saarikoskiですが、残念ながら私には詩を読み解く能力がありません。そのため Saarikoski の詩そのものについては触れないまま進めさせていただきます。Saarikoski が活躍した別の場が翻訳です。

【7】Saarikoski は翻訳でも活躍

Saarikosken tuotanto on laaja. Hän on runojen lisäksi kirjoittanut romaaneja ja kuunnelmia sekä suomentanut suuren joukon anglosaksista ja antiikin kreikkalaista kirjallisuutta, mm. James Joycen *Odysseuksen*, Salingerin *Sieppari ruispellossa* ja Homeroksen *Odysseian*, Euripideen *Herakleen* ja Saphon runoja.

■語句・文法

tuotanto「制作（物）」< tuottaa < tuoda／kuunnelma「ラジオ劇、ラジオ用原稿」／suuri joukko +［分］「多くの～」／James Joyce（18882-1941）はアイルランド出身の作家／*Odysseuksen*［属対］< *Odysseus*『オデュッセウス』（この Joyce の小説の英語の原題は *Ulysses*『ユリシーズ』ですが、ユリシーズはオデュッセウスのラテン名だそうです）／ J. D. Salinger（1919-1010）はアメリカの作家／sieppari「捕手、キャッチャー」< siepata／ruis-pellossa「ライ麦畑で」［内］< -pelto／Homeroksen［属］< Homeros（紀元前 8 世紀ころの吟遊詩人とされるが、実在の人物かどうかは不明）／*Odysseian*［属対］< *Odysseia*『オデュッセイア』／Euripideen［属］< Euripides（紀元前約 480-406）は古代ギリシャの悲劇詩人）／*Herakleen*［属対］< *Herakles*『ヘラクレス』／Sapho（紀元前 7 世紀末-紀元前 6 世紀初頭）は古代ギリシャの女性詩人。

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski の作品は広い。彼は詩に加えて書いた｜小説を｜そしてラジオ原稿を｜さらにフィンランド語に訳した｜［大きな集団を｜アングロサクソンの｜そして古代ギリシャの文学の］、｜なかでも｜ジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』、｜サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』｜そしてホメロスの『オデュッセイア』、｜エウリピデスの『ヘラクレス』｜そしてサッポー（サッフォー）の詩を。

◎意訳

Saarikoski の作品は広い範囲におよんでいる。彼は詩に加え小説やラジオ放送用の原稿も書いており、さらにジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』、そしてホメロスの『オデュッセイア』、エウリピデスの『ヘラクレス』、サッポー（サッフォー）の詩など、アングロサクソンや古代ギリシャの文学作品を多くフィンランド語に訳している。

【8】Saarikoski の翻訳が巻き起こしたことは？

Mitä on suomen kieli ja millaista sen pitäisi olla? Tätä on kyselty erilaisin tavoin jo vuosisatojen ajan. Vuonna 1961 ongelman ympärille syntyi suorastaan pieni riita, kun kustannusosakeyhtiö Tammi julkaisi J. D. Salingerin romaanin *Sieppari ruispellossa* Pentti Saarikosken käännöksenä. Suomennos oli uudenlaista kirjoitettua kieltä – se pyrki mukailemaan ruokottomasti puhuttua suomea, ja tämä ratkaisu provosoi sekä sai osakseen runsaasti kritiikkiä. Romaanin 16-vuotias päähenkilö Holden Caulfield tuli suomenkieliseksi muuttuessaan lukijoiden mielissä myös rivommaksi ja uhkaavammaksi kuin sopivaa.

■語句・文法

on kyselty「（何度も）尋ねられてきた」受完 ＜kysellä＜kysyä／erilaisin tavoin「さまざまな方法で」［複具］＜ erilainen tapa／kustannus「出版」＜ kustantaa／osake-yhtiö「株式会社」／käännöksenä「翻訳として」［様］＜ käännös ＜ kääntää／suomennos「フィンランド語訳」＜ suomentaa／mukailla「模倣する」／ruokottomasti「下品に」［副］＜ ruokoton／ratkaisu「解決、解決方法、手法」 ratkaista／provosoida「引き起こす、挑発する」／saada osakseen「受ける、招く、集める」／kritiikki「批判、非難」／tuli「なった」は、少し離れていますが、rivommaksi と uhkaavammaksi と結びついています／suomen-kieliseksi muuttuessaan「フィンランド語話者に変わるときに」（muuttuessaan e 不［内］+ 単 3 所接〔時構〕 ＜ muuttua）／rivommaksi「より卑猥に」［変］＜rivompi 比 ＜rivo／uhkaavammaksi「より脅威的に」［変］＜uhkaavampi 比 ＜uhkaava 能現分 ＜uhata「脅す」

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランド語とは何のか｜それはどのようなものであるべきなのか。このことは問われてきた｜さまざまな方法で｜すでに何世紀もの間。1961 年に、この問題の周りに生まれた｜文字通り小さな論争が、｜［〈次の〉ときに｜出版社である株式会社 Tammi が出版した｜J.D.サリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』を｜Pentti Saarikoski の翻訳で］。フィンランド語訳は新しい種類の｜書かれた言語だった｜―それはまねようとした｜口汚く話されるフィンランド語を、｜そして、この手法は挑発した｜そして多くの批判を集めた。この小説の 16 歳の主人公ホールデン・コールフィールドはなった｜フィンランド語話者に変わるときに｜読者の心の中では｜また、より卑猥で脅威的に〈なった〉｜適切な範囲を超えて。

◎意訳

フィンランド語とは何であり、どのようなものであるべきなのか。この問題はすでに数世紀の間さまざまな形で問いかけられてきた。そして 1961 年に Tammi 出版社が J.D.サリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』を Pentti Saarikoski の訳で出版したとき、この問題の周りには文字通り小さな論争が生まれた。Saarikoski のフィンランド語訳は新しい種類の書かれたフィンランド語だった―それは下品な話し言葉をまねようとしたが、この手法は人々を挑発するものであり多くの批判を浴びることになった。翻訳の中で主人公である 16 歳のホールデン・コールフィールドがフィンランド語を話すよう

になると、読者たちの心の中では彼はまた限度を超えて卑猥な、そして脅威を与えるものとなっていった。

【9】Saarikoski たちは規範にしたがわなかった

Saarikoski ja muut modernistit halusivat koetella katujen puhuttu kieli korkeakulttuurina pidetyn kirjallisuuden piiriin. Saarikosken suomennos nostatti polemiikin, koska se ei seurannut kirjakielen normeja ja toi siihen selkeästi vieraskielisiä vaikutteita slangin käytön myötä. Suomennos ei asettunut sovinnaisiin kaavoihin, ja sitä on arvosteltu myös omavaltaisuudesta suhteessa alkuteokseen. Kaikessa anarkistisuudessaan käännös on erinomainen lähestymiskulma kysymykseen siitä, mitä on suomen kieli ja puhuvatko suomalaiset suomea.

■語句・文法

koetella「試みる」< koettaa < kokea／puhuttu「話されるような」受過分 < puhua／korkea-kulttuurina「ハイカルチャーだと、上位文化だと」（「大衆文化」と対比されるもの）／pidetyn「みなされるような」［属対］< pidetty 受過分 < pitää／piiriin「範囲に、領域へ、圏内へ」［入］< piiri／nostattaa「持ち上げる、引き起こす」< nostaa／polemiikki「論争」／seurata「したがう、追う」／normeja「規範を、基準を」［複分］< normi／vaikutteita「影響を」［複分］< vaikute < vaikuttaa／slangi「俗語、スラング」／sovinnaisiin kaavoihin「規範に準ずるような形式へ」［複入］< sovinnainen kaava／on arvosteltu「批判されている」受完 < arvostella < arvostaa < arvo／oma-valtaisuudesta「身勝手さについて、恣意性について」［出］< -valtaisuus < -valtainen／alku-teokseen「原書へ、原文へ」［入］< -teos／anarkistisuudessaan「無政府主義性において、アナーキズム性において」［内］+ 単 3 所接 < anarkistisuus < anarkistinen < anarkisti／lähestymis-kulma「接近角、進入角、視点」

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski と他のモダニストたちは望んだ|試すことを|通りで話される言語を|上位文化だとみなされるような文学の領域へ。Saarikoski のフィンランド語訳は引き起こした|論争を、|なぜならそれはしたがっていなかったから|書き言葉の規範に|そして、そこへ持ち込んだから|明らかに異言語の影響を|俗語の使用を通じて。フィンランド語訳は踏み込まなかった|規範に準ずるような形式へ、|そして、それは非難された|また身勝手さについて|原文との関係において。すべての|アナーキズム性において|翻訳はすばらしい視点である|問題に対する|〈次のこと〉|［についての、|フィンランド語は何であり、フィンランド人たちはフィンランド語を話すのか］

◎意訳

Saarikoski や他のモダニストたちは上位文化だとみなされている文学という領域の中に、通りで話される言葉を持ち込むことを望んでいた。そして、Saarikoski の翻訳は書き言葉の規範にしたがわず、スラングを使用することを通じて明らかな異言語の影響を翻訳の中に持ち込んだため、論争を

巻き起こすことになった。Saarikoski のフィンランド語訳は規範に準ずるような手法をとらず、また原文との関係において恣意的であったことにより非難された。Saarikoski の翻訳は、そのアナーキズム的な性格のすべてにおいて、フィンランド語とは何なのか、フィンランド人はフィンランド語を話しているのかという問題に対して優れた視点を提供するものとなっている。

★補足

ここまでで出てきたように、アメリカの作家サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』はアメリカ本国でも議論を呼んだ作品です。フィンランドでは、Saarikoski の翻訳によりさらに大きな話題をなりますが、それは何といっても「フィンランド語」という言語をどうとらえるのかという問題と関連していたようです。

【10】作家や詩人はどのように言語と向き合うのか？

Kirjailija suhtautuu kieleen hallitsevammin, omistavammin kuin tutkija, joka selvittää, millainen kieli on, miten kieli toimii ja miten kieltä voisi kuvata. Runoilijan tehtävä on uudistaa kieltä.

■語句・文法

suhtautua「向き合う、対応する、反応する」／hallitsevammin「より支配的に」［副］比 < hallitseva 能現分 < hallita／omistavammin「より所有しているかのように」［副］比 < omistava 能現分 < omistaa

●フィンランド語理解のための訳例

作家は向き合う|言語に|より支配的に、|より所有しているかのように|研究者よりも、|それは明らかにする、|［言語はどのようなものか、|言語はどのように機能するのか|そして言語はどのように記述できるのか］。詩人の役割は|言語を刷新することである。

◎意訳

言語とはどのようなものか、言語はどのように機能するのか、そして、言語はどのように記述することができるのかを明らかにしようとする研究者に対して、作家は言語を支配する者として、言語を所有する者として言語に向き合っている。つまり、詩人の役割とは言語を刷新することなのである。

【11】フィンランド語って一つ？

Saarikosken käännös ja sitä seurannut keskustelu nostivat esille sen tosiasian, että Suomessa ei puhuttu vain yhtä suomen kieltä, mutta polemiikki paljasti myös kielen merkityksen identiteetille.

■語句・文法

sitä seurannut「それに続いたような」（seurannut 能過分 < seurata）／nostaa esille「前へ上げる、見せる、持ち出す」／tosi-asia「真実、事実」／ei puhuttu「話されていなかった」受過否 < puhua／

polemiikki「論争」／paljastaa「明らかにする、暴露する」

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski の翻訳|そして、それに続く議論は明らかにした|〈että 以下の〉［ような真実を、|フィンランドでは話されていたのではないという|ただ一つのフィンランド語だけが］、|しかし、この論争はまた明らかにした|言語の重要性をも|アイデンティティにとっての。

◎意訳

Saarikoski の翻訳と、それに続いて起こった議論は、フィンランドではただ一つのフィンランド語が話されているわけではないという事実を示すことになったが、この論争はまたアイデンティティというものにとって言語がもつ意味というものも明らかにすることになった。

★補足

資料Ⅱ-3で Aleksis Kivi という作家を取り上げました。そこで見た通り、おもに作品の中で彼が使った「フィンランド語」が大きな非難を浴び、失意の中で彼は亡くなりました。そのような Kivi の作品と Saarikoski の翻訳は、どちらも「フィンランド語」というものに何を求めるのかという共通の問題を私たちに提示してくれます。

【12】かつて批判された『七人兄弟』を思い出させる Saarikoski の翻訳

Saarikosken aloittama kielidebatti ei ollut ensimmäinen laatuaan, vaan Suomessa on kiistelty kielistä useaan otteeseen. 1800-luvulla murteet taistelivat keskenään, ja hiukan myöhemmin niin sanotussa kieliriidoissa olivat suomen- ja ruotsinkieliset vastatusten. Aikanaan myös Aleksis Kiven *Seitsemää veljestä* (1870) arvosteltiin, koska sen kieli ei vastannut suomalaiselle kirjallisuudelle ja kansalle asetettuja ihanteita. Ensimmäinen suomenkielinen romaani ei ollutkaan vakavamielinen kertomus sivistyneistön mittapuilla räävittömästä ja karkeasta veljesjoukosta. Lähes sata vuotta myöhemmin myös riita Salinger-käännöksestä koski sitä, mikä on sopivaa ja oikeaa kieltä kirjallisuudessa. Saarikoski seurasi aikakauden valtaa kyseenalaistavia tendenssejä eikä hyväksynyt kielen säätelyä ylhäältä käsin.

■語句・文法

aloittama「始めたような」動分 < aloittaa < alkaa／debatti「議論、論争」／laatuaan「その種のうちで」［分］+ 単 3 所接 < laatu（ensimmäinen laatuaan「その種のものでは最初の」）／on kiistelty「議論されてきた」受完 < kiistellä < kiistää／useaan otteeseen「何度も」［入］< usea ote／murteet「方言は」［複主］< murre／niin sanotussa「いわゆる」［内］< niin sanottu（この語句が修飾する kieli-riidoissa は複数の内格になっているので、niin sanotussa ではなく niin sanotuissa と複数の内格になっているべきだと思いますが、引用文献では単数内格になっています）／kieli-riidoissa「言語紛争において」［複内］< -riita／vastatusten「向かい合って、対峙して」／aikanaan「かつて」［様］+ 単 3 所接 < aika（= aikoinaan）／Aleksis Kivi と *Seitsemän veljestä* については資

料Ⅱ-3を参照／arvosteltiin「非難された」受過 < arvostella < arvostaa < arvo／asetettuja「設定されたような」［複分］< asetettu 受過分 < asettaa／ihanteita「理想を／に」［複分］< ihanne ⇒ ihana／vakava-mielinen「まじめな、真剣な」／sivistyneistö「教養層」／mitta-puilla「物差しで、基準で」［複接］< -puu／räävittömästä「粗野な、下品な」［出］< räävitön／karkeasta「がさつな、乱暴な」［出］< karkea／koskea「触れる、関わる」／kyseen-alaistavia「疑問を投げかけるような、疑うような」［複分］< -alaistava 能現分 < -alaistaa < alainen < ala／säätelyä「規制を」［分］< säätely < säädellä <säätää／ylhäältä käsin「上（の方）から」

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski が始めた言語論争は|その種の最初のものではなかった、|〈そうではなく〉フィンランドでは|議論されてきた|言語について|何度も。1800 年代には|方言たちが|闘った|たがいに、|そして少し後には|いわゆる言語紛争において|フィンランド語系とスウェーデン語系は対峙した。かつて|また Aleksis Kivin の *Seitsemää veljestä* (1870)は非難された、|なぜならその言語は応じていなかったから|［フィンランドの文学と民衆に対して|設定されていた理想を］。最初のフィンランド語の小説はまじめな物語ではなかった|［教養層の物差しにより|粗野でがさつな兄弟集団について］。ほぼ百年後に|また紛争が|サリンジャーの翻訳について|触れた|〈次のこと〉［に、|何が適切な、そして正しい言語なのか|文学において］。Saarikoski はしたがった|その時代の権力を疑問視するような傾向に|そして認めなかった|言語の規制を|上から。

◎意訳

Saarikoski が始めたとされる言語論争は何も最初のものではなく、フィンランドにおいては言語について何度にもわたって議論されてきた。1800 年代にはフィンランド語の方言どうしが闘うことになったし、その少し後にはいわゆる「言語紛争」においてフィンランド語系フィンランド人とスウェーデン語系フィンランド人は対峙することとなった。かつてはまた、Aleksis Kivi による *Seitsemän veljestä* 『七人兄弟』（1870）も、その言語がフィンランドの文学や民衆に求められた理想に沿うものではないという理由により非難を受けることになった。この最初のフィンランド語による小説は、教養層の物差しによれば粗野で乱暴な兄弟たちを描いた、けっしてまじめな物語ではなかったのである。それからほぼ百年後に Saarikoski が翻訳したサリンジャーの小説に関する論争もまた、文学において適切で正しい言語とは何なのかという問題に関わるものとなった。Saarikoski は時代の権力に疑問を投げかける傾向にしたがい、言語に対する上からの規制というものを認めようとはしなかった。

★補足

フィンランドでは 1800 年代に標準的なフィンランド語を確立しようとする中で、方言の間で大きな争いが起こります。また、「フィンランド」という国家は「フィンランド語」という単一の言語にもとづくべきだと主張する人々がスウェーデン語排斥の動きを活発化させると、フィンランド語を擁護する側とスウェーデン語を支持する側との間に kieli-riita、あるいは kieli-taistelu と呼ばれる激しい争いも起こります。そして、すでに触れた Aleksis Kivi の小説 *Seitsemän veljestä* 『七人兄弟』もまた、大きな議論を巻き起こしています。このようにフィンランドでは繰り返し「フィンランド語」というものが社会を揺る

がす議論の原因となってきました。

『フィンランド語の世界を読む』22 課で取り上げた Väinö Linna による *Tuntematon sotilas*『名もなき兵隊』も、登場人物たちがそれぞれの方言を話すことから、やはり議論となりました。そして、フィンランドでは「文学」が社会の中で大きな非難を浴び、ときには裁判沙汰になるといったことが頻繁に起こるようになります。そのような現象を kirja-sota「本戦争、文学戦争」と呼びますが、なかでも Hannu Salama という作家が被告人となった裁判が有名です。

【13】言語は何度も議論の対象となってきた

Puhuttu, monien murteiden suomi haluttiin 1800-luvulla muuttaa kirjoitetuksi yleiskieleksi, jotta tieteen, taiteen ja valtionhallinnon modernit kirjalliset instituutiot voisivat toimia suomen kielellä. Tämän suuren kansallisen projektin tarkoitus oli nostaa suomalaiset vertailukelpoiseksi kansakunnaksi muiden kansojen rinnalle. 1960-luvulle tultaessa suunta oli nähtävästi kääntynyt kohti kirjallisesti ja yhteiskunnallisesti monimuotoisempaa kieltä. Modernisaatio oli pyrkinyt yhdenmukaistamaan suomen kieltä ja kansaa, mutta sotien jälkeen modernit kirjailijat eivät enää noudattaneet yhteisiä sääntöjä vaan yrittivät rikkoa kielen ja kansallisen yhteisön rajoja. Tämä ei jäänyt vaille reaktioita, ja 1960-lukua leimasivat useat kirjasodat, joiden pyörteissä esimerkiksi Hannu Salama joutui oikeuteen vastaamaan *Juhannustansseihin* (1964) kirjoittamistaan riveistä.

■語句・文法

haluttiin「望まれた」受過 < haluta／kirjoitetuksi yleis-kieleksi「書かれた共通語に」[変] < kirjoitettu yleis-kieli（kirjoitettu 受過分 < kirjoittaa）／jotta …「…するように」／valtion-hallinto「国家行政、国家統治」／kirjallinen「書き言葉の、文書による」< kirja／instituutio「組織、機関、制度」／vertailu-kelpoiseksi「比較できるような、匹敵するような」[変] < -kelpoinen < kelpo < kelvata／kansa-kunnaksi「ネーションに」[変] < -kunta（「ネーション」については資料Ⅱ-2の、とくに【10】の文章の後の「★補足」を参照）／rinnalle「～と並んで」⇒ rinnalla, rinnalta／tultaessa「来るときに」受 e 不[内]〔時構〕< tulla／nähtävästi「明らかに」[副] < nähtävä 受現分 < nähdä／kääntyä「曲がる、向かう」／kohti「～へ向けて」（+[分]）／moni-muotoisempaa「より多様な」[分] < -muotoisempi 比 < -muotoinen < muoto／modernisaatio「近代化」／pyrkiä「しようとする」（+[入]～MA 不[入]）／yhden-mukaistamaan「統一する、標準化する、画一化する」MA 不[入] < -mukaistaa < -mukainen／sääntö「規則」／rikkoa「壊す、破る」／rajoja「境界を」[複分] < raja／jäädä vaille = jäädä ilman「～なしのままになる」／leimasivat「特徴づけた、スタンプを押した」過複 3 < leimata < leima／kirja-sota「本戦争、文学戦争」（詳しくは【14】以降の文章で扱っていきます）／pyörteissä「渦の中で」[複内] < pyörre < pyörtää／Hannu Salama（1936-）はフィンランドの作家／oikeuteen「裁判へ」[入] < oikeus／*Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』（1964）は Hannu Salama の小説／kirjoittamistaan「自らの書いたような」[複出]+ 単 3 所接 < kirjoittama 動分 < kirjoittaa／riveistä「行について」[複出] < rivi「列、行」

●フィンランド語理解のための訳例

話されていたような、|多くの方言のフィンランド語を|望まれた|1800 年代に|変えることが|書かれた共通語に、|〈次の〉[ために|科学の、芸術の、そして国家統治の|現代的な|文書による制度が|機能できるだろう|フィンランド語で]。この大きな国家的プロジェクトの目的は|[上げることだった|フィンランド人たちを|比較できるようなネーションへ|他の民族と並んで]。1960 年代へ来るときに|方向は|明らかに|曲がっていた|〈次のこと〉[へ向けて|書き言葉の点で|そして社会的に|より多様な言語]。近代化はしようとしていた|統一する|フィンランド語と民族を、|しかし戦争の後で|現代の作家たちは|もはやしたがわなかった|共通の規則に|〈そうではなく〉壊そうと試みた|言語の|そして民族的共同体の境界を。これは反応がないままにはならなかった、|そして 1960 年代を|特徴づけた|多くの文学戦争が、|[それらの渦の中で|たとえば Hannu Salama は陥った|裁判へ|答えることへ|*Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』(1964 年出版)へ自ら書いた行について]。

◎意訳

科学、芸術、そして国家統治といった書き言葉にもとづく現代的な制度がフィンランド語で機能するよう、それまでは話されるものだったフィンランド語を、そして多くの方言から成り立っていたフィンランド語を、1800 年代には文字に書かれる共通語へと作り変えることが望まれた。この大きな国家プロジェクトは、他の民族たちに匹敵するようなネーションへとフィンランド人を押し上げることを目的としていた。1960 年代を迎えると、その方向性は書き言葉においても社会的にもより多様な言語へと変わっていった。近代化はフィンランドの言語と民族を統一しようとしたが、戦後になると現代的な作家たちはもはや共通の規範というものにしたがうことなく、言語や民族的共同体の境界線を打ち破ろうとしていた。このことはさまざまな反応を呼び起こすことになり、その結果として「文学戦争」と呼ばれる現象が 1960 年代を特徴づけることになる。その渦の中で、たとえば作家 Hannu Salama は自らの作品である *Juhannustanssit*『夏至の踊り』(1964 年出版)における記述について裁判で責任を問われることになった。

【14】1960 年代は「文学戦争」の時代

Erityisesti toisen maailmansodan jälkeen useat yksittäiset romaanit saivat Suomessa mielipiteiltään jakautuneen, kiihkeän vastaanoton. Paavi Rintalan *Sissiluutnantin* (1963) ja Hannu Salaman *Juhannustanssien* (1964) synnyttämien kamppailujen jälkeen Pekka Tarkka kiteytti ilmiön käsitteeseen ”kirjasota”. (220)

Kirjasotien vilkkain vaihe näyttää sijoittuneen juuri 1960-luvulle. Kirjoittajien ja yleisön maailmankuvat ja odotukset olivat silloin räikeimmin ristiriidassa.

■語句・文法

yksittäinen「個々の、散発的な」／mieli-piteiltään「意見の点からすると」[複奪]+ 複 3 所接 < -pide < pitää／jakautuneen「分かれたような」[属対]< jakautunut 能過分 < jakautua < jakaa／kiihkeä「激しい、熱狂的な、白熱した」／vastaan-otto「受け入れ、反応」< ottaa vastaan／Paavi Rintala(1930-1999)はフィンランドの作家で、彼の小説 *Sissi-luutnantti*『奇襲部隊の中尉』(1963 年)

は戦争の描写について大きな議論を巻き起こしましたが、そもそもは映画の脚本だったようです／synnyttämien「生み出したような」［複属］< synnyttämä 動分 < synnyttää < syntyä／kamppailu「闘い、奮闘」< kampailla／Pekka Tarkka（1934-）はフィンランドの文学研究者／kiteyttää「結晶化させる、具体化する、表現する」< kide／käsitteeseen「概念へ」［入］< käsite < käsittää < käsi／vilkkain「もっとも活発な」最 < vilkas／näyttää sijoittuneen「位置していたようだ」〔分構〕（sijoittuneen［属］< sijoittunut 能過分 < sijoittua < sijoittaa < sija）／räikeimmin「もっとも激しく」［副］最 < räikeä／risti-riidassa「対立して」［内］< -riita

●フィンランド語理解のための訳例

とくに第二次世界大戦後、|多くの個々の小説は受けた|フィンランドでは|意見の点からすれば|分かれた|白熱した反応を。Paavi Rintala の *Sissi-luutnantti*『奇襲部隊の中尉』（1963 年）や Hannu Salama の *Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』（1964 年）が生み出した|戦いの後で|Pekka Tarkka は結晶化した|現象を|概念へ|「文学戦争」。

文学戦争の|もっとも活発な段階は|位置していたようだ|まさに 1960 年代へ。作家たちと大衆の|世界像と期待は|そのとき|最も激しく対立していた。

◎意訳

とくに第二次世界大戦後には、フィンランドでは多くの小説が正反対の白熱した反応を受けることになった。Paavi Rintala の *Sissiluutnantti*『奇襲部隊の中尉』（1963 年）や Hannu Salama の *Juhannustanssit*『夏至の踊り』（1964 年）によって生まれた争いの後で、そのような現象を Pekka Tarkka は「文学戦争」という概念として明確化した。

文学戦争がもっとも激しく戦われた時期は、まさに 1960 年代だったと考えられる。そのとき、作家たちと大衆の世界観はもっとも激しい対立の中にあった。

★補足

ここで出てきた Paavi Rintala の *Sissiluutnantti* については、この小説の出版前に作られた映画 *Sissit* をインターネットで見られるようです。

🎬 *Sissit* <https://areena.yle.fi/1-902725>

そでは、【14】に出てきた kirjasota の名づけ親である Pekka Tarkka さん自身の言葉を読んでいきます。

【15】「文学戦争」はフィンランド独特な現象か？

”Suomalainen kirjasota on tietääkseni lähes ainutlaatuinen ilmiö. Tuskin missään muualla romaani voi nykyään saada osakseen yhtä yleistä ja vilkasta huomiota. […] Kirjallisuuden ja laajan lukijakunnan välit ovat Suomessa nykyään kuitenkin kireämmät kuin eurooppalaisen realismin kukoistuskautena. Sensuurivaatimukset, oikeudenjutut ja takavarikot ovat Suomessa yleisiä. Tämä viittaa häiriöön kirjallisuuden ja yhteiskunnan suhteissa.” Pekka Tarkka, *Paavo Rintalan saarna ja seurakunta* (1966)

■語句・文法

tietääkseni「私の知る限り」A 不［変］+ 単 1 所接 < tietää／ainut-laatuinen「独特な、ユニークな」／muualla「他の場所で」⇒ muualta, muualle < muu／saada osakseen「受ける、集める、向けられる」／yhtä「同じように」［分］< yksi／lukija-kunta「読者層」／kireämmät「より緊張した」［複主］< kireämpi 比 < kireä／kukoistus-kautena「全盛期に」［様］< -kausi（kukoistus「開花、繁栄」< kukoistaa < kukka）／sensuuri「検閲」／vaatimus「要求」< vaatia／oikeuden-juttu「裁判」／taka-varikko「没収、押収」／häiriö「不調、故障、障害、混乱」< häiritä／seura-kunta「小教区、小教区の信徒団」

●フィンランド語理解のための訳例

「フィンランドの文学戦争は|私の知る限り|ほとんど独自の現象だ。ほとんど～ない|どこでも|他の場所で|小説ができる|現在|受ける|同じくらい一般的な、そして活発な注目を。[. . .]文学と広い読者層の間は|フィンランドでは|現在|しかしながら|より張りつめている|〈次のこと〉［よりも|ヨーロッパのリアリズムの全盛期における］。検閲の要求、裁判、そして没収は|フィンランドでは一般的だ。これは示している|障害を|文学と社会の関係における。」［Pekka Tarkka『Paavo Rintala の説教と小教区』1966 年）より］

◎意訳

「私の知る限り、フィンランドの文学戦争というものはほぼフィンランドでしか見られない現象である。他のどのような場所においても、小説がフィンランドにおけるのと同じくらい一般的で白熱した注目を集めるということはない。[. . .]しかし、現在のフィンランドにおいて文学と幅広い読者層の関係は、ヨーロッパにおけるリアリズムの全盛期よりもさらに張りつめたものとなっている。検閲の要求、裁判沙汰、そして押収といったことはフィンランドにおいては一般的である。このことは、文学と社会の関係に何らかの混乱が生じていることを示している。」［Pekka Tarkka『Paavo Rintala の説教と小教区』（1966 年）より］

★補足

それでは作家 Hannu Salama が被告人となった裁判を中心に見ていくことにします。

【16】Hannu Salama は法廷で被告人に

Hannu Salaman *Juhannustansseista* (1964) käyty kiista oli 1960-luvun kirjasodista dramaattisin ja ehkä myös kauaskantoisin. Kriitikot ylistivät teosta, mutta suuren huomion kohteeksi kirja päätyi vasta, kun arkkipiispa Martti Simojoki laajasti uutisoidussa juhlapuheessaan tulkitsi romaanihenkilö Hiltusen humalaisen pilasaarnan jumalanpilkaksi. Suuren julkisen keskustelun ja Kokoomuksen alulle paneman eduskuntakyselyn saattelemana kirjailija Salama haastettiin oikeuteen jumalanpilkasta.

■語句・文法

käyty「行われたような」受過分< käydä／dramaattisin「もっとも劇的な」最 < dramaattinen／kauas-kantoisin「もっとも遠く将来にわたるような、もっとも将来に影響を及ぼすような」最 < -kantoinen < kanto < kantaa／ylistää「称える、称賛する」< ylinen < yli／kohteeksi「対象に」[変]< kohde／päätyä「いたる、～になる」／arkki-piispa「大司教、大監督」／uutisoidussa「報道されたような」[内]< uutisoitu 受過分 < uutisoida < uutinen < uusi／juhla-puheessaan「自らの祝辞において」[内]+ 単 3 所接 < -puhe < puhua（Simojoki はある学校の設立 75 周年記念の祝辞を述べたようです）／tulkita「解釈する」／Hiltunen は Hannu Salama の小説 *Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』に登場する職人／pila「冗談、悪ふざけ」／jumalan-pilkaksi「神を笑いものにすることとして、神への冒涜として」[変]< -pilkka（pilkka「笑いもの、からかい」）／Kokoomuksen「国民連合党の」[属]< Kokoomus／alulle paneman「始めたような」（alulle [向]< alku, paneman [属]< panema 動分 < panna、panna alulle「始める」）／edus-kunta-kysely「国会質疑」／saattelemana「付き添うものとして、導くものとして」[様]< saattelema 動分 < saatella < saattaa／haastettiin「召喚された」受過 < haastaa／oikeuteen「裁判（所）へ」[入]< oikeus

●フィンランド語理解のための訳例

Hannu Salama の *Juhannuos-tanssit*『夏至の踊り』（1964 年）について|行われた論争は|1960 年代の文学戦争の中で|もっとも劇的な|そしてまた、もっとも長く影響を及ぼすものだった。批評家たちは称賛した|作品を、|しかし大きな注目の対象に|本はいたった|やっと〈次のような〉[ときに|大監督 Martti Simojoki が|広く報道された|祝辞の中で|解釈した|小説の登場人物 Hiltunen の|酔った|悪ふざけの説教を|神に対する冒涜だと]。大きな公の議論の|そして国民連合党の始めた国会質疑の|付き添うものとして|作家 Salama は|召喚された|裁判へ|神への冒涜について。

◎意訳

Hannu Salama の *Juhannustanssit*『夏至の踊り』（1964 年）をめぐって繰り広げられた論争は、1960 年代の文学戦争の中ではもっとも劇的で、また長く影響を及ぼすものとなった。批評家たちは作品を称賛したが、しかし作品が多くの注目を集めるようになったのは、教会大監督である Martti Simojoki が広く報道されることになった祝辞の中で、小説の登場人物である Hiltunen が酒に酔って行った悪ふざけの説教が神を冒涜するものだという解釈を示してからのことだった。公に行われた

大きな論争と、国民連合党の要求により始まった国会審議に導かれるようにして、作家である Salama は神に対する冒涜について裁判所へ召喚されることになった。

【17】Salama は執行猶予つき懲役刑に

60-luvusta tuli kirjasotien vuosikymmen, jolloin otettiin useita kertoja mittaa kirjailijoiden ilmaisuvapaudesta. Hannu Salaman *Juhannustanssit* (1964) suututti oikeistolaisia kansanedustajia ja kirkollisia piirejä, joiden edusmiehenä esiintyi arkkipiispa Martti Simojoki. Salamaa syytettiin *Juhannustanssien* perusteella oikeudessa 1965 jumalanpilkasta. Koska kirjailija tunnusti tekonsa, hänet tuomittiin ehdonalaiseen vankeuteen, ensi painos takavarikoitiin ja uusi sensuroitiin. Kirjailijan tuomio kumottiin seuraavana vuonna, kun presidentti Urho Kekkonen armahti Salaman, mutta sensuroimaton painos ilmestyi vasta 1990.

■語句・文法

otettiin mittaa「測られた、競われた」（otettiin 受過 < ottaa、ottaa mittaa には「競う」といった意味があるようです）／ilmaisu-vapaudesta「表現の自由について」［出］< -vapaus < vapaa／suututtaa「怒らせる」< suuttua／oikeistolainen「右派の」< oikeisto < oikea ⇔ vasemmistolainen < vasemmisto < vasen／piiri「圏、領域、界」／edus-miehenä「代表者として」［様］< -mies／syytettiin「責められた、告訴された」受過 < syyttää < syy／tunnustaa「認める、告白する」／tekonsa「自らの行為を」［属対］+ 単 3 所接 < teko／tuomittiin「判決を下された、宣告された、処された」受過 < tuomita／ehdon-alaiseen vankeuteen「執行猶予つき懲役へ」［入］< ehdon-alainen vankeus（vankeus < vanki ⇒ vangita）／painos「版」< painaa／taka-varikoitiin「没収された」受過 < -varikoida < -varikko／sensuroitiin「検閲された」受過 < sensuroida ⇒ sensuuri／tuomio「判決」／kumottiin「破棄された」受過 < kumota／armahtaa「恩赦する」⇒ armo／sensuroimaton「検閲されていないような」否分 < sensuroida

●フィンランド語理解のための訳例

60 年代から来た|文学戦争の 10 年間が、|そのときに争われた|何度も|作家たちの表現の自由について。Hannu Salama の *Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』は怒らせた|右派の国会議員たちを|そして教会界を、|それらの代表者として|登場した|大監督 Martti Simojoki が。Salama は|訴えられた|*Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』にもとづき|法廷において|1965 年|神に対する冒涜について。［なぜなら|作家は自らの行為を自白したので］、|彼は宣告された|執行猶予つきの懲役へ、|初版は没収された|そして新しい〈版〉は検閲を受けた。作家の判決は破棄された|翌年に、|〈次の〉［ときに|大統領 Urho Kekkonen は|恩赦した|Salama を］、|しかし検閲されていない版は出た|やっと 1990 年に。

◎意訳

1960 年代は文学戦争の 10 年となったが、その間何度にもわたって作家たちの表現の自由について争われた。Hannu Salama の *Juhannustanssit*『夏至の踊り』は右派の国会議員たちや教会界を

怒らせることになったが、その代表として登場したのが教会の大監督である Martti Simojoki だった。1965 年に Salama は *Juhannustanssit*『夏至の踊り』による神に対する冒涜について法廷で責を問われることになった。そして作家自身が自らの行為を自白し認めたため、彼は執行猶予つきの懲役刑に処され、初版は押収されるとともに新版に対しては検閲が行われた。翌年に Urho Kekkonen 大統領が Salama に恩赦を与えたことにより、前年の判決は破棄されることとなったが、それでも *Juhannustanssit*『夏至の踊り』が」検閲を受けないまま出版されたのは 1990 年になってからのことであった。

★補足

大統領 Urho Kekkonen が恩赦を与えたと聞くと、彼が表現の自由を擁護するような人だったのではないかと思ってしまいますが、ことはそう単純ではありません。彼はなんと 25 年間も大統領を務めた人物ですが、自らの地位を確実なものにするためにソ連と裏でさまざまな交渉や取引を行っていたのではないかという話も随分と出てきています。同時に、当時のフィンランドではソ連を刺激するような報道はかなり抑えられており、その背後に Kekkonen がいたと考えても不思議ではありません。

それでは、裁判における Salama の発言を見ていきます。

【18】Salama は神を笑いものにするつもりだったと自白した

Oikeudessa Salama löiällikällä niin sovitteluhenkisen puolustusasianajajansa kuin vakavamieliset syyttäjänsäkin tekemällä täyden tunnustuksen kirjallisesti ja suullisesti: ”Ensi torstain jumalanpilkkaoikeudenkäyntiin viitaten haluan kohteliaimmin ilmoittaa, että olen romaanilla ”Juhannustanssit” halunnut pilkata ja loukata kansalaisten jumalakäsitystä ja uskonnollisia tunteita. Se ei tietenkään ole romaanin yksinomainen tarkoitus, ei Hiltusen saarnan kohdallakaan, sillä mikään taideteos ei missään yksityiskohdassaan enempää kuin kokonaisuutena ole näin yksioikoisesti selitettävissä. Mutta eräs teokseni motiiveista on nimenomaan ollut jumalanpilkka ― ―.”

■語句・文法

oikeudessa「法廷において、裁判において」[内]< oikeus < oikea／lyödäällikällä「仰天させる、驚かせる」／sovittelu-henkinen「和解をめざすような」（sovittelu < sovitella < sovittaa < sopia、-henkinen「～の精神の、～の考えの」／puolustus-asian-ajajansa「自分の弁護士を」[属対]+単 3 所接 < -ajaja（puolustus「防衛、弁護」< puolustaa、asian-ajaja「弁護士」）／vakava-mielinen「まじめな、真剣な」／syyttäjänsä「自らの検察官を、訴追者を」[属対]+ 単 3 所接 < syyttäjä < syyttää／tekemällä「することにより」MA 不[接]< tehdä／täyden「完全な」[属対]< täysi／tunnustuksen「告白を、自白を」[属対]< tunnustus < tunnustaa／jumalan-pilkka-oikeuden-käyntiin「神に対する冒涜裁判へ」（oikeuden-käynti「裁判、公判」）／viitaten「言及することにより」e 不[具]< viitata（+[入]）／kohteliaimmin「もっとも丁寧に、もっとも礼儀正しく」[副]最 < kohtelias < kohdella < kohdata < kohta／pilkata「笑いものにする、あざける」< pilkka／loukata「傷

つける」／jumalan-käsitystä「神の概念を」［分］< -käsitys／yksin-omainen「唯一の」／kohdalla「箇所において」［接］< kohta／missään yksityis-kohdassaan「いかなる個々の箇所においても」（missään［内］< mikään、yksityis-kohdassaan［内］+ 単 3 所接 < -kohta「個々の箇所、詳細」）／enempää kuin …「…以上に」／kokonaisuutena「全体として」［様］< kokonaisuus < kokonainen < koko／yksi-oikoisesti「単純に、明快に」［副］< -oikoinen < oiko／ei ole selitettävissä「説明できない」（selitettävissä［複内］< selitettävä 受現分 < selittää）／teokseni「私の作品の」［属］+ 単 1 所接 < teos／motiiveista「動機のうち、主題のうち」

●フィンランド語理解のための訳例

裁判において Salama は驚かせた｜和解をめざすような自らの弁護人を｜〈次と〉同様に｜深刻な検察官を｜完全な自白をすることにより｜書面で、そして口頭で｜：「次の木曜日の神に対する冒涜裁判に言及し｜私はもっとも丁寧にお知らせしたい、｜私は小説 *Juhannus-tanssit*『夏至の踊り』により笑いものにしたかった｜そして傷つけたかった｜人々の神の概念を｜そして信仰上の感情を。それはもちろん［～ではない｜小説の唯一の目的］、｜［～ではない｜Hiltunen の説教の場面においても］、｜というのもどんな芸術作品も［～ない｜いかなる個々の場面において｜全体として以上に｜単純に説明できるような］。しかし、［ある一つのものは｜私の作品の動機のうち］｜まさしく｜神をあざ笑うこと。」

◎意訳

裁判において Salama は書面および口頭による完全な自白をすることで、深刻な面持ちの検察官と同様に、和解を見出そうとする自らの弁護人をも仰天させた：「来る木曜日の神に対する冒涜裁判につきまして、私は小説 *Juhannustanssit*『夏至の踊り』により、人々の神に対する考え方や宗教的な感情というものをあざ笑い、侮辱したかったのだということを慎んでお知らせしたいと存じます。もちろん、それが小説のただ一つの目的ではありませんし、それは Hiltunen の説教の場面についてもいえることです。なぜなら、全体としてはもちろんのこと、いかなる細部においても、芸術作品というものはこのように単純に説明できるものではないからであります。しかし、私の作品の動機の一つは、まさに神をあざ笑うことであったのです……。」

【19】ある種の人々にとっては「神に対する冒涜」だったのだろう

Oikeudessa Salama totesi halunneensa ”pilkata sellaista Jumalaa Ja Kristusta, joitten nimissä voidaan suunnata aggressioita yksilölliseen ajatteluun”. Kyse oli aina myös tulkitsijoiden osallisuudesta. Salaman teksti oli jumalanpilkkaa vain niille, jotka omista tulkintahorisonteistaan näkivät tietynlaisen ”yksilöllisen ajattelun” jumalanpilkkana.

■語句・文法

totesi halunneensa「自分が望んでいたと述べた」〔分構〕（halunneensa［属］+ 単 3 所接 < halunnut 能過分 < haluta）／joitten = joiden「それらの」［複属］< joka／aggressio「攻撃的態度、敵意のある反応」／tulkitsijoiden「解釈者たちの」［複属］< tulkitsija < tulkita／osallisuudesta「参

加について、寛容について、役割について」［出］< osallisuus < osallinen < osa／niille, jotka …「…の人々にとって」（niille［向］< ne）／tulkinta-horisonteistaan「自らの解釈の水平線から、自らの解釈の視点から」［出］< -horisontti／tietyn-lainen「ある種の」

●フィンランド語理解のための訳例

法廷において|Salama は述べた|望んでいたと|「笑いものにする|〈次のような〉神とキリストを|それらに名において|向けることができる|攻撃的態度を|個人の考えへ」。問題は常にまた|解釈者の関与についてである。Salama の文章は神に対する冒涜である|ただ〈次のような〉［人々にとって、|それらは自らの解釈の視点からみなした|ある種の「個人の考え」を|神に対する冒涜として］。

◎意訳

法廷において Salama は「それらの名において個人の考えに対して攻撃的な態度を向けることを可能にするような、そのような神やキリストを笑いものにする」ことを自分は望んでいたと述べた。問題はまた、常に解釈者が関係しているということである。つまり、自らの解釈の視点から、ある種の「個人の考え」を神に対する冒涜だとみなすような人々にとってだけは、Salama の文章はたしかに神に対する冒涜だったのである。

【20】言語の自由と、それにより傷つく人ではどちらが重要か？

Salama-oikeudenkäynnin lopputulos, armahdus, vahvisti käsityksen, että viimeistään 1960-puolivälissä suomalainen tulkintayhteisö oli niin hajaantunut, että millään taholla ei ollut lopullista sananvaltaa lyödä lukkoon sanataideteoksen merkitystä. Se myös arvotti yksilöiden sananvapauden korkeammalle kuin sananvapauden joillekin vastaanottajille mahdollisesti aiheuttaman kärsimyksen estämisen.

■語句・文法

armahdus「恩赦」< armahtaa／vahvistaa「強化する、確認する」／viimeistään「遅くとも」／tulkinta-yhteisö「解釈の共同体」（「解釈の共同体」とは英語で Interpretive community といいますが、アメリカの文芸評論家である Stanley Fish という人が使い始めた概念で、我々個人が作品を解釈する際にも、解釈の方法を提供する共同体に属しているのだといった考え方のようです。／hajaantua「分散する、バラバラになる」／sanan-valta「発言権」／lyödä lukkoon「確定させる、決定する」／sana-taide「言語芸術、文学」／arvottaa「（価値を）評価する」< arvo／korkeammalle「より高くへ」［向］< korkeampi 比 < korkea／joillekin vastaan-ottajille「ある受け取る人々に対して」［複向］< jokin vastaan-ottaja（vastaan-ottaja < ottaa vastaan「受け取る、迎える」）／mahdollisesti「ひょっとすると、もしかすると」［副］< mahdollinen／aiheuttaman「引き起こすような」［属］< aiheuttama 動分 < aiheuttaa／kärsimys「苦しみ、苦痛」< kärsiä／estämisen「防ぐことを」［属対］< estäminen 動名 < estää

●フィンランド語理解のための訳例

Salama 裁判の最終結果は、|恩赦は|強化した|〈次のような〉[理解を、|遅くとも 1960 年代の中頃には|フィンランドの解釈の共同体は|とてもバラバラになっていたので、|どの方面にもなかった|最終的な発言権は|確定するための|言語芸術作品の意味を]。それはまた価値づけた|個々人の言論の自由を|より高くへ|〈次のこと〉[よりも|言論の自由が|ある受取人たちに|ひょっとすると|引き起こすような|苦痛を|防ぐこと]。

◎意訳

Salama 裁判の最終的な結果として恩赦が与えられたということは、遅くとも 1960 年代の中頃にはフィンランドの「解釈共同体」、つまり芸術や文学を解釈する世界は分断されており、言語芸術作品の意味を決定する最終的は発言権をどの集団も持ち合わせていなかったということを確認することになった。それはまた、ひょっとすると言論の自由というものは一部の人々に苦痛をもたらすかもしれないが、そのような苦痛を生み出すのを妨げることよりも、個々人の言論の自由そのものの方を高く価値づけることにもなったのである。

★補足

ここまで話題の中心となってきた Hannu Salama は、1975 年に *Pentti Saarikoski – Legenda jo eläessään*『Pentti Saarikoski—生きながらにしてすでに伝説』という本を出しています。

さて、kirjasota は翻訳文学にも及びますが、その中で Pentti Saarikoski の翻訳した作品も裁判の対象となっていきます。

【21】翻訳文学においても文学戦争の影響が

Käännöskirjallisuudessa vedettiin rajoja hyväksyttävän eroottisuuden ja tuomittavan pornografisuuden välille. Sekä Agnar Myklen *Laulu punaisesta rubiinista* (1957) että Henry Millerin *Kravun kääntöpiiri* (1962) tuomittiin ilmestymisensä jälkeen pitkiksi ajoiksi levityskieltoon.

■語句・文法

käännös-kirjallisuus「翻訳文学」／vedettiin「引かれた」受過 < vetää／hyväksyttävän「受け入れられるべき、認められるべき」[属]< hyväksyttävä 受現分 < hyväksyä／eroottisuus「エロチシズム、エロチックであること」< eroottinen／tuomittavan「断罪されるべき」[属]< tuomittava 受現分 < tuomita／pornografisuus「ポルノ、猥褻性、猥褻物」／Agnar Mykle（1915-1995）はノルウェーの作家ですが、1957 年の *Laulu punaisesta rubiinista*『赤いルビーについての歌』（原題 *Sangen om den røde rubin*）は、不道徳であるという理由により裁判になります。最終的に、ノルウェーでは彼は無罪とはなりますが、裁判やマス・メディアにおける騒ぎに疲弊し、その後は世捨て人のような生活を送ったようです。一方、ここで書かれているようにフィンランドでは彼の作品は発禁処分となります。／Henry Miller（1891-1990）はアメリカの作家ですが、彼の作品 *Kravun kääntöpiiri*『北回帰線』（原題 *Tropic of Cancer* で 1934 年にパリで出版されています）は、その性表現が問題になり、アメリカでも

発禁処分となっています。／ilmestymisensä「出版の」［属］+ 複 3 所接 < ilmestyminen 動名 < ilmestyä／pitkiksi ajoiksi「長い間」［複変］< pitkä aika／levitys-kieltoon「流通禁止へ」［入］< -kielto（levitys「流布、販売、流通」< levittää < levitä、kielto < kieltää）

●フィンランド語理解のための訳例

翻訳文学において|引かれた|境界線が|受け入れられるべきエロチシズムの|そして断罪されるべきポルノの|間へ。Agnar Mykle の *Laulu punaisesta rubiinista*『赤いルビーについての歌』と|Henry Miller の *Kravun kääntöpiiri*『北回帰線』の両方は|処せられた|出版の後で|長い間|流通禁止へ。

◎意訳

翻訳文学においては、許容されるべきエロチシズムと断罪されるべきポルノとの間に境界線が引かれた。その結果、アグナール・ミュクレの *Laulu punaisesta rubiinista*『赤いルビーについての歌』とヘンリー・ミラーの *Kravun kääntöpiiri*『北回帰線』はどちらも、出版後は長い間発禁処分とされた。

【22】Saarikoski の訳したミラーの小説は押収される

Henry Millerin *Kravun kääntöpiiri* oli kielletty Yhdysvalloissa 30 vuotta. Korkein oikeus vapautti sen niukalla enemmistöllä vasta 1964. Toukokuussa 1962 Suomen oikeusministeri määräsi Pentti Saarikosken suomentaman teoksen takavarikoitavaksi saatuaan epäsiveellisten julkaisujen valvontalautakunnan lausunnon.

■語句・文法

oli kielletty「禁じられていた」受過完 < kieltää／Yhdys-valloissa「合衆国において」［複内］< -vallat［複主］< valta／korkein「最高の」最 < korkea／vapauttaa「解放する、自由にする」< vapaa／niukalla enemmistöllä「わずかな多数により」［接］< niukka enemmistö／suomentaman「フィンランド語に訳したような」［属対］< suomentama 動分 < suomentaa < suomi／taka-varikoitavaksi「没収されるように」［変］< -varikoitava 受現分 < -varikoida／saatuaan「得た後で」［分］+ 単 3 所接〔時構〕 < saatu 受過分 < saada／epä-siveellisten julkaisujen valvonta-lauta-kunta「猥褻刊行物監視委員会」（epä-siveellinen「猥褻な、みだらな」、julkaisu「出版物」、valvonta「監視」、lauta-kunta「委員会」、なお、この委員会設置の流れについては【25】を参照）／lausunto「声明、意見主、報告書」< lausua

●フィンランド語理解のための訳例

ヘンリー・ミラーの『北回帰線』は禁じられていた|合衆国で|30 年間。最高裁判所は|解放した|それを|わずかな多数派により|やっと 1964 年に。5 月に|1962 年|フィンランドの法務大臣は|命じた|Pentti Saarikoski の|フィンランド語訳した作品を|没収されるように|［得た後で|猥褻刊行物監視委員会の報告を］。

◎意訳

ヘンリー・ミラーの『北回帰線』は、アメリカ合衆国において 30 年もの間発禁処分とされていた。最高裁判所が僅差で同作品の発禁処分を解いたのは 1964 年になってからのことだった。1962 年 5 月にフィンランドの法務大臣は猥褻刊行物監視委員会から報告を受けると、Pentti Saarikoski がフィンランド語に翻訳した『北回帰線』を押収するよう命じた。

★補足

ヘンリー・ミラーの『北回帰線』をフィンランド語に翻訳したのが、やはり Pentti Saarikoski でした。翻訳が出版されたのが 1962 年ですが、その後裁判へと発展していくことになります。

【23】Saarikoski の翻訳は法に反している

Heinäkuun 3. Jyväskylän raastuvanoikeus tuomitsi Gummeruksen toimitusjohtajan Mauno Salojärven epäsiveellisten julkaisujen levittämisestä annetun lain 1 pykälän 1 momentin nojalla sakkoihin ja kirjan tuoton valtiolle menetetyksi. Teoksen jäljelläolevat kappaleet tuomittiin valtiolle ja hävitettäviksi. Oikeudessa läsnä ollut Pentti Saarikoski puhkesi tuomion kuultuaan kättentaputuksiin ja sai sakot oikeuden häpäisystä. Teos julkaistiin uudelleen 1970.

■語句・文法

raastuvan-oikeus「下級裁判所、地方裁判所」（1993 年以降は käräjä-oikeus）／toimitus-johtaja「最高経営責任者」／epä-siveellisten julkaisujen levittämisestä annettu laki「猥褻刊行物の流布に関して与えられた法」（epä-siveellinen「卑猥な、非道徳的な」⇔ siveellinen、levittämisestä「流布することについて」［出］< levittäminen 動名 < levittää、annettu 受過分 < antaa）。／1 pykälän 1 momentin nojalla「第 1 条第 1 項にもとづき」／sakkoihin「罰金へ」［複入］< sakko／tuotto「収入、収益」< tuottaa／menetetyksi「失われたものとして」［変］< menetetty 受過分 < menettää < mennä／jäljellä-olevat「残っているような」［複主対］< -oleva 能現分 < olla／kappale「冊、部」／hävitettäviksi「廃棄されるように」［複変］< hävitettävä 受現分 < hävittää／läsnä ollut「出席していたような」（ollut 能過分 < olla）／puhkesi kätten-taputuksiin「拍手を始めた」（puhkesi 過単 3 < puhjeta、kätten［複属］< käsi、taputuksiin［複入］< taputus < taputtaa「（手を）たたく」／kuultuaan「聞いた後で」［分］+ 単 3 所接〔時構〕 < kuultu 受過分 < kuulla／häpäisystä「冒涜について、侮辱について」［出］< häpäisy < häpäistä

●フィンランド語理解のための訳例

7 月 3 日|Jyväs-kylä の下級裁判所は判決を下した|Gummerus 社の最高経営責任者 Mauno Salo-järvi に|［猥褻刊行物の流布に関して与えられた法の|第 1 条第 1 項にしたがい］|罰金へ|そして［本の利益を|国家へ|失われるものとして］。作品の|残っている|部数は|［判決を下された|国家へ|そして廃棄されるように］。法廷に出席していた Pentti Saarikoski は|始めた|判決を聞いた後で|拍手を|そして受けた|罰金を|法廷の侮辱について。作品は出版された|あらためて|1970 年に。

◎意訳

1962 年 7 月 3 日、Jyväskylä 下級裁判所は「猥褻刊行物の流布に関して与えられた法」の第 1 条第 1 項にしたがい、Gummerus 社の最高経営責任者である Mauno Salojärvi に対して罰金刑を言い渡し、また作品により得た利益は国家に収めるよう判決を下した。作品の残部は廃棄のため国家による没収を命じられた。法廷に出席していた Pentti Saarikoski は判決を聞くといきなり拍手を始め、法廷を侮辱したことにより罰金を科された。同作品があらためて出版されたのは 1970 年になってからのことであった。

★補足

【23】には Epäsiveellisten julkaisujen levittämisestä annettu laki「猥褻刊行物の流布に関して与えられた法」という法律が出てきますが、この法律の正式名称はおそらく Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」だと思います（ehkäisemisestä「防止することについて」［出］< ehkäiseminen < ehkäistä）。この法律については、次の【24】【25】も参考にしてください。

【24】文学を裁くことになった法と条約

Suomi liittyi vuonna 1927 kansainväliseen yleissopimukseen epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ja kaupaksipitämisen ehkäisemisestä. Sopimus oli solmittu vuonna 1923 ja sen tarkoituksena oli rajoittaa pornografian leviämistä. Sopimusvelvoitteiden vuoksi Suomessa säädettiin asiasta laki.

■語句・文法

kansain-välinen yleis-sopimus epä-siveellisten julkaisujen levittämisen ja kaupaksi-pitämisen ehkäisemisestä「猥褻刊行物の流布及び取引の禁止のための国際条約」は当時の国際連盟による 1923 年の条約（yleis-sopimus「（一般）条約」、kaupaksi-pitämisen「取引することの」［属］< -pitäminen 動名 pitää、pitää kaupaksi は古い表現だと思いますが「売る、商売する」といった意味だったようです）／oli solmittu「結ばれていた、締結されていた」受過完 < solmia／leviämistä「広がることを、流布されることを」［分］< leviäminen 動名 < levitä／velvoitteiden「義務の」［複属］< velvoite < velvoittaa < velka／säädettiin「制定された」受過 < säätää

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランドは加わった｜1927 年に｜「猥褻刊行物の流布及び取引の禁止のための国際条約」へ。条約は結ばれていた｜1923 年に｜そして｜その目的としてあった｜制限することが｜ポルノグラフィの｜広がることを。条約の義務のために｜フィンランドでは制定された｜問題について｜法が。

◎意訳

フィンランドは 1927 年に国際連盟による「猥褻刊行物の流布及び取引の禁止のための国際条約」に加わった。この条約は 1923 年に締結されており、猥褻刊行物の流布を制限することを目的としていた。そして、条約が求める義務により、フィンランドではこの問題について法律が制定された。

★補足

【24】に出てきた条約の正式名称は *Epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ja kaupaksipitämisen ehkäisemistä tarkoittava kansainvälinen yleissopimus*「猥褻刊行物の流布と取引を防止することを目的とする国際条約」とされているようです。なお、英語名称は *International Convention for the Suppression of the Circulation of and Traffic in Obscene Publications*、日本語名称は「猥褻刊行物の流布及び取引の禁止の為の国際条約」となっています。そして、この条約にしたがってフィンランドで 1927 年に生まれたのが、【23】で登場した *Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä*「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」です。

【25】ただ法のもつ意味は 1960 年代になるまでは小さなものだった

Laki epäsiveellisten julkaisujen leviämisen ehkäisemisestä sääti rangaistavaksi sellaisen julkaisun levittämisen, valmistamisen, hallussa pitämisen ja näkyvillä pitämisen, joka loukkaa sukupuolikuria tai säädyllisyyttä. Vuonna 1957 lakiin tehdyssä muutoksessa perustettiin sopimusvelvoitteiden perusteella valvontalautakunta, jota alettiin kutsua pornografialautakunnaksi, joka antoi oikeusministeriölle lausuntoja julkaisujen sukupuolikuria tai siveellisyyttä loukkaavasta luonteesta. Määritelmät sukupuolikurista ja siveellisyydestä jäivät varsin avoimiksi ja muuttuivat vuosikymmenten kuluessa. Lain merkitys pysyi suhteellisen vähäisenä 1960-luvulle saakka.

■語句・文法

sääti「制定した、定めた」過単 3 < säätää／rangaistavaksi「罰せられるように」［変］< rangaistava 受現分 < rangaista／valmistaminen「制作すること」動名 < valmistaa < valmis／hallussa pitäminen「所持すること」（pitäminen 動名 < pitää、pitää hallussa「所持する」）／näkyvillä pitäminen「見せておくこと」（näkyvillä「見えるように」［複接］< näkyvä 能現分 < näkyä < nähdä）／joka［関］の先行詞は julkaisu だと思います／suku-puoli-kuri「性に関する規律、性に関する規範、性に関する道徳観、性倫理」／säädyllisyys「良識」< säädyllinen < sääty／tehdyssä「行われたような」［内］< tehty 受過分 < tehdä／perustettiin「設立された」受過 < perustaa／pornografia-lauta-kunnaksi「ポルノグラフィ委員会と」［変］< -kunta／siveellisyys「倫理性、道徳性」< siveellinen／loukkaavasta「傷つけるような」［出］< loukkaava 能現分 < loukata／jäädä avoimiksi「開かれたままになる、あいまいなままになる」（avoimiksi［複変］< avoin）／kuluessa「経る中で」e 不［内］〔時構〕< kulua／suhteellisen「比較的」［属］（形容詞の属格は、他の形容詞や副詞を修飾する副詞として機能します）／vähäisenä「小さく、小さなものとして」［様］< vähäinen < vähä

●フィンランド語理解のための訳例

「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」は定めた｜罰せられるように｜〈次のような〉［刊行物の｜流布することを、｜製作することを、｜所持することを｜そして陳列することを］、｜［それは傷つける｜性に関する規範を｜あるいは良識を］。1957 年に｜法律へなされた変更の中で｜設立された｜

条約の義務にもとづき|監視委員会が、|それを呼び始めた|ポルノグラフィ委員会と、|それは与えた|法務省へ|［意見書を|刊行物の|性に関する規範を|そして倫理性を|傷つけるような性格について］。［定義は|性に関する規範について|そして倫理性について］|非常にあいまいなままだった|そして変化した|数十年間が|経る中で。法の意義はとどまった|比較的小さく|1960 年代まで。

◎意訳

「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」は、性に関する道徳感や良識を侵害するような刊行物を流布すること、制作すること、所持すること、そして陳列することを処罰の対象とするよう定めた。1957 年に行われた法改正により、条約の求める義務にしたがい監視委員会が設立されたが、それは「ポルノグラフィ委員会」と呼ばれるようになった。同委員会は、刊行物が性に関する道徳観や良識を侵害する性格をもつものかどうかについて法務省へ意見書を提出した。ただし、性に関する道徳観や良識に関する定義は非常にあいまいなままであり、数十年を経る中で変化していった。法のもつ意義は 1960 年代まではごく小さなままだった。

★補足

「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」は文字通り猥褻な出版物の流布を妨げることを目的としていたのだろうと思いますが、実際にはポルノ雑誌などではなく多くの文学作品が標的にされていきます。

【26】翻訳作品が次々に発禁処分に

Suuren huomion sai kuitenkin kirjallisuus, sillä lain perusteella kiellettiin esimerkiksi Agnar Myklen *Laulu tulipunaisesta rubiinista*, Henry Millerin *Kravun kääntöpiiri* ja myös Hannu Salaman jumalanpilkkaoikeudenkäynnin kohteena olleeseen *Juhannustansseihin* pyrittiin puuttumaan siveellisyyssääntelyn kautta. Oma erikoisuutensa lakiin liittyen on, että kappale *Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä* joutui Yleisradion esitysrajoitettujen kappaleiden listalle vaikka alun perin Rauli Badding Somerjoki vain lauloi lakitekstin.

■語句・文法

kiellettiin「禁止された」受過 < kieltää／kohteena olleeseen「対象となっていたような」（kohteena［様］< kohde、olleeseen［入］< ollut 能過分 < ollut）／pyrittiin「試みられた」受過 < pyrkiä／puuttumaan「介入する」MA 不［入］< puuttua／siveellisyys-sääntely「倫理性の統制、倫理性の規制」（sääntely < säännellä ⇒ säätää）／erikoisuutensa「独自性、特異性」［単主］+ 単 3 所接 < erikoisuus < erikoinen／lakiin liittyen「法に関連して」（liittyen e 不［具］< liittyä）／kappale「（音楽の）曲」／Yleis-radio「フィンランド公共放送株式会社」（日本における NHK に相当すると考えればよいと思います）／esitys-rajoitettujen「演奏制限されたような」（esitys「演奏、発表」< esittää、rajoitettujen「制限されたような」［複属］< rajoitettu 受過分 < rajoittaa < raja）／alun perin「もともと、本来」／Rauli Badding Somerjoki（1947-1987）はフィンランドの歌手、作詞家、作曲家／laki-tekstin「法の条文を、法のテキストを」

●フィンランド語理解のための訳例

大きな注目を｜得た｜しかしながら｜文学が、｜というのも［法にもとづき禁止された｜たとえば Agnar Myklen の *Laulu tuli-punaisesta rubiinista*、｜Henry Miller の *Kravun kääntö-piiri*］｜そしてまた［Hannu Salama の｜神に対する冒涜裁判の｜対象となっていた｜*Juhannus-tanssit* にも｜介入しようとした｜倫理性の統制を通じて］。［自身の特異性となっているのは｜法に関連して］｜〈次の〉ことである、｜曲 *Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä*「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」は｜陥った｜フィンランド公共放送株式会社の｜演奏制限された曲のリストへ｜〈次のようである〉［にもかかわらず｜もともと Rauli Badding Somerjoki は｜ただ歌っていた｜法の条文を］。

◎意訳

しかし、「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」との関連で大きな注目を集めたのは文学作品だった。というのも、同法にもとづいて、たとえばアグナール・ミュクレの Laulu *tulipunaisesta rubiinista* やヘンリー・ミラーの *Kravun kääntöpiiri* は発禁とされ、また「神に対する冒涜裁判」の対象となっていた Hannu Salama の小説 *Juhannustanssit*『夏至の踊り』に対しても、倫理観の統制を通じて介入しようとしたのである。この法律との関連で異彩を放っていたのが *Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä*「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」というタイトルの曲である。その曲はもともと Rauli Badding Somerjoki がただ法の条文を歌っていただけのものだったにもかかわらず、フィンランド公共放送株式会社が放送禁止とする曲のリストに載せられることになってしまったのである。

★補足

【26】に出てきた Rauli Badding Somerjoki の歌ですが、YouTube で聞くことができるようです。画面には、確かに法律の条文が出てきて、その通りに歌っています。なかなか味のある曲です。

Laki epäsiveellisten julkaisujen levittämisen ehkäisemisestä
<https://www.youtube.com/watch?v=-cMHznS6ft4>

【27】法は意味を失い、1998 年に廃止

Lain ja valvontalautakunnan merkitys väheni 1970-luvun jälkeen ja rikoslain uudistuksen yhteydessä vuonna 1998 laki kumottiin. Suomi ei kuitenkaan irtautunut sopimuksesta, jonka täyttäminen edellyttäisi sopimuksen edellyttämää lainsäädäntöä ja valvontaelimen.

■語句・文法

väheni「減った」過単 3 < vähetä < vähä／rikos-laki「刑法」（rikos-laki は「1889 年第 39 号法令」ですが、たびたび改正されています）／uudistus「改正」< uudistaa < uusi／yhteydessä「関連して」［内］< yhteys < yksi／kumottiin「廃止された」受過 < kumota／irtautua「離れる、離脱する」⇒ irti, irto-／täyttäminen「満たすこと、履行すること」動名 < täyttää < täysi／edellyttäisi「前提とす

るだろう、求めるだろう」［条］現単 3 < edellyttää < edeltää < esi-／edellyttämää「前提とするような、求めるような」［分］< edellyttämä 動分 < edellyttää／lain-säädäntö「法令」／valvonta-elin「監視機関」

●フィンランド語理解のための訳例

法の｜そして監視委員会の｜意味は減った｜1970 年代の後で｜そして｜刑法の改正に関連して｜1998 年に｜法は廃止された。フィンランドはしかし離脱しなかった｜条約から、｜［それを満たすことは｜前提とするだろう｜条約の前提とするような｜法令と監視機関を］。

◎意訳

「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」と、それにもとづき設置された監視委員会のもつ意味は 1970 年代以降になると低下し、1998 年における刑法改正に伴い同法は廃止された。しかし、フィンランドは同法のもとになった「猥褻刊行物の流布及び取引の禁止の為の国際条約」は離脱しなかったが、同条約の履行は条約が前提とするような法令と監視機関の存在を求めるはずだろうが。

★補足

裁判の判決は【23】で見た通りですが、確認の意味も込めて次の【28】を読みましょう。

【28】判決を聞いて拍手を始めた Saarikoski

Raastuvanoikeus katsoi, että *Kravun kääntöpiiriä* oli sen kaunokirjallisista ansioista huolimatta pidettävä lain tarkoittamana epäsiveellisenä julkaisuna. Toimitusjohtaja Salojärvi sai 100 000 markan sakon, rikoksen tuottama hyöty tuomittiin menetetyksi valtiolle, takavarikoidut ja toisen painoksen puolivalmiit kappaleet samoin kuin kirjan valmistamiseen tarkoitetut painolaatat määrättiin hävitettäviksi. Kun oikeuden puheenjohtaja löi päätöksen vakuudeksi nuijan pöytään, Saarikoski kuiskasi Jouni Lompololle: »Vääryyttä oikeuden valekaavussa.» Sitten hän alkoi taputtaa. »Tämä ei ole mikään sirkus», oikeuden puheenjohtaja huomautti ankarasti.

■語句・文法

kauno-kirjallisista ansioista huolimatta「文学的な貢献にもかかわらず、文学的に優れた点にもかかわらず」／oli pidettävä「みなされるべきだった」（pidettävä 受現分 < pitää）／tarkoittamana「意味するような」［様］< tarkoittama 動分 < tarkoittaa／markka「マルッカ」はフィンランドの通貨で 2022 年まで使用されていました（次の「★補足」を参考にしてください）。／tuottama「もたらすような、生み出すような」動分 < tuottaa < tuoda／taka-varikoidut「没収されたような」［複主対］< -varikoitu 受過分 < -varikoida／puoli-valmis「途中まで完成しているような」／tarkoitetut「意図されたような、計画されたような」［複主対］< tarkoitettu 受過分 < tarkoittaa／paino-laatta「印刷版」／määrättiin「命じられた」受過 < määrätä／hävitettäväksi「廃棄されるように」［変］< hävitettävä

受現分 ＜hävittää＜hävitä／vakuudeksi「保証のために、確認のために」［変］＜vakuus／nuija「小槌、ガベル、こん棒」／kuiskata「ささやく」／Jouni Lompolo（1936-2010）はフィンランドの作家／vale-kaapu「嘘の法服、偽の法服」／taputtaa「手を叩く、拍手をする」／ankarasti「厳しく」［副］＜ankara

●フィンランド語理解のための訳例

下級裁判所はみなした｜*kääntö-piiri*『北回帰線』は｜その文学上の貢献にもかかわらず｜みなされるべきだ｜法の意味するような｜猥褻刊行物だと。最高経営責任者 Salo-järvi は得た｜10 万マルッカの罰金を、｜［犯罪のもたらした利益は｜判決を下された｜失われるように｜国家へ］、｜［没収されたような｜そして第 2 版の途中まで完成した本は］｜〈次と〉［同様に｜本を製作することへ｜意図された｜印刷版］｜命じられた｜廃棄されるように。〈次の〉［ときに｜裁判の議長が｜叩いた｜決定の保証として｜小槌を｜テーブルへ］、｜Saarikoski はつぶやいた｜Jouni Lompolo へ｜：「誤りだ｜法廷の偽の法服の中で。」それから彼は手を叩き始めた。「これは何のサーカスでもない」、｜裁判の議長は｜指摘した｜厳しく。

◎意訳

下級裁判所は、その文学上の功績にもかかわらず、*Kravun kääntöpiiri*『北回帰線』は「猥褻刊行物の流布を防止することに関する法律」でいうところの「猥褻刊行物」に当たるものだとみなした。Gummerus 社の最高経営責任者である Salojärvi には 10 万マルッカの罰金が科され、同作品を出版するという犯罪行為によりもたらされた利益は国家に没収され、また押収された作品と未完成となっている第 2 版は、作品制作のために用意された印刷版とともに廃棄するよう命じられた。裁判長が結審の合図として小槌をテーブルにたたきつけると、Saarikoski は Jouni Lompolo に対して「偽物の法服を着た不正である」とつぶやいた。それから彼が手を叩き始めると、「これはサーカスでも何でもない」と裁判長は厳格に言い渡した。

★補足

【28】の中に「10 万マルッカの罰金とありましたが、フィンランド統計局のサイトにマルッカをユーロに換算してくれるページがありました。

”rahanarvonmuunnin”. *Tilastokeskus*.
<https://www.stat.fi/tup/laskurit/rahanarvonmuunnin.html>

このページで換算したところ、1962 年における 10 万マルッカは 2022 年における約 2 475 ユーロに相当します。1 ユーロを 130 円で計算すると、10 万マルッカは約 32 万円ということにになると思います（私の計算が合っているか自信がありませんが）。

さて、裁判の話が続きましたが、そこで問題とされたのが「言語」「フィンランド語」でした。それでは、言語と Saarikoski の話へ戻っていきましょう。

【29】文学が引き起こした憤慨とは何を意味するのか

Kiven romaanin ja Saarikosken käännöksen aiheuttama pahennus kertoo siitä, kuinka tärkeää kieli on – se rakentaa identiteetin syvärakenteita, liikuttaa tunteita ja näin myös selittää sitä pelkoa, että kirja voi vain sanojensa voimalla turmella lukijansa.

■語句・文法

aiheuttama「引き起こしたような」動分 < aiheuttaa／pahennus「憤り、憤慨、感情を害されること」< pahentua < pahentaa < paha／syvä-rakenteita「深層構造」［複分］< -rakenne < rakentaa（「深層構造」とはそもそもはアメリカの言語学者である Noam Chomsky が言語分析において使用した概念で、とくに構造主義の研究者たちがさまざまな分野で応用したものだと思います。ごく簡単にいえば目に見える pinta-rakenne「表層構造」と対立するもので、言語に関していえば、すべての言語が共通して持っているような基本的な構造のことをさします。英語では deep structure、surface structure といいます。／liikuttaa「動かす」< liikkua／pelko「恐怖心、恐れ」／turmella「ダメにする、害する、堕落させる」

●フィンランド語理解のための訳例

Kivi の小説の｜そして Saarikoski の翻訳の｜引き起こしたような｜憤慨は｜語る｜〈次のこと〉［について｜どれほど重要なのか｜言語は］―それは建てる｜アイデンティティの深層構造を、｜動かす｜感情を｜そして｜こうしてまた｜説明する｜〈次のような〉［恐怖を｜本はできる｜言葉の力だけにより｜ダメにする｜その読者を］。

◎意訳

Aleksis Kivi の小説 *Seitsemän veljestä*『七人兄弟』や Saarikoski の翻訳が引き起こした憤慨というものは、言語というものがいかに重要なものなのかということについて語っているだろう。言語はアイデンティティの深層構造を構築し、人の感情を動かし、そして、このようにしてまた、Aleksis Kivi の小説や Saarikoski の翻訳が引き起こした憤慨というものは、本というものが言葉の力だけにより読者を堕落させることができるのではないかという恐怖を説明するのである。

【30】『ライ麦畑でつかまえて』は書くことにより口頭で語られる言葉

Vielä 1960-luvulla yleiskieli määriteltiin sen mukaan, mikä oli koulutetun ja sivistyneen kansanosan tapa käyttää kieltä. Saarikosken kääntämä Holden puhui kaikkea muuta kuin tätä tarkasti normitettua puheenpartta. Ja hän nimenomaan puhui. ”Minun käsitykseni mukaan Holden ei kuitenkaan kirjoita tarinaansa vaan puhuu sen; Salinger on ikään kuin hänen sihteerinsä. *Sieppari ruispellossa* on kirjoitettua puhetta”, määritteli Saarikoski käännöksensä taustoja. Näin hän pyrki paradoksaalisesti kirjoittamalla kohti puhekieltä.

■語句・文法

määriteltiin「定義された」受過 < määritellä／sen mukaan, mikä …「何が…なのかにしたがって」／koulutetun「教育を受けたような」[属]< koulutettu 受過分 < kouluttaa < koulu／sivistyneen「教養のあるような」[属]< sivistynyt 能過分 < sivistyä／kansan-osa「人口の一部」／kääntämä「翻訳したような」動分 < kääntää／kaikkea muuta kuin …「…以外のものは何でも、…とは程遠いものを」／normitettua「標準化されたような」[分]< normitettu 受過分 < normittaa < normi／puheen-partta「慣用句を、話し方を」[分]< -parsi／ikään kuin …「まるで…のように」／sihteerinsä「秘書」[単主]+ 単3所接 < sihteeri／kirjoitettua「書かれたような」[分]< kirjoitettu 受過分 < kirjoittaa／taustoja「背景を」[複分]< tausta ⇒ taka-／paradoksaalisesti「逆説的なことに」[副]< paradoksaalinen／kohti puhe-kieltä「話し言葉へ向かって」(kohti +[分]「～へ向かって」

●フィンランド語理解のための訳例

まだ 1960 年代には|共通語は定義されていた|〈次のこと〉[にしたがって|何が|教育を受けた、そして教養のある一部の人々の方法なのか|言語を使用する]。Saarikoski の翻訳したホールデン|話した|〈次のもの〉[とは程遠いものを|この正確に標準化された話し方]。そして彼はまさしく話した。「私の理解によれば|ホールデンはしかしながら書いていない|自分の物語を|〈そうではなく〉それを話した；サリンジャーはまるで彼の秘書である。『ライ麦畑でつかまえて』は|書かれた発話である」、|と定義した|Saarikoski は|自らの翻訳の背景を。こうして彼はめざした|逆説的なことに|書くことにより|話される言葉へ向かって。

◎意訳

1960 年代にはまだ、共通語とは教育を受けた教養のある人々がどのように言語を使うのかということにもとづいて定義されていた。Saarikoski が翻訳した『ライ麦畑でつかまえて』の主人公であるホールデンが話したのは、このようなしっかりと標準化された話し方とは程遠いものだった。そして、ホールデンはまさしく話していたのである。「私の理解によれば、ホールデンは自分の物語を書いていたのではなく話していたのである。作者であるサリンジャーはまるでホールデンの秘書のようなものである。つまり『ライ麦畑でつかまえて』という小説は書かれた発話なのである」と Saarikoski は自らの翻訳の背景を説明した。こうすることで彼は、逆説的なことではあるが、書くという行為により口頭で語られる言葉をめざしていたのである。

【31】共通語は下から上へと変化しなければならない

Saarikoski kulminoi aikakauden käsityksiä nähdessään sivistyneistön kielenkäyttöön pohjaavan yleiskielen epädemokraattisena ja epäajanmukaisena; hän vaati anarkiaa, kansanvaltaisuutta ja kansainvälisyyttä kirjoitettuun kieleen. Hänen mukaansa sen piti muuttua alhaalta ylöspäin ja saada myös ulkopuolisia vaikutteita.

■語句・文法

kulminoida「完了させる、頂点にいたらせる」／nähdessään「見るときに」e 不［内］+ 単 3 所接〔時構〕 < nähdä／sivistyneistö「教養層、知識層」< sivistynyt < sivistyä／pohjaavan「もとづくような」［属］< pohjaava 能現分 < pohjata < pohja／epä-demokraattisena「非民主的なものとして」［様］< -demokraattinen／epä-ajan-mukaisena「時代にそぐわないものとして」［様］< -mukainen／anarkia「アナーキー、無秩序、混乱」／kansan-valtaisuus「民主主義、人々が権力を握ること」／alhaalta「下から」⇒ alhaalla, alhaalle／ylös-päin「上（の方）へ」

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski は|頂点にいたらせた|時代の考え方を|［見るときに|教養層の言語使用にもとづくような共通語を|非民主的なものとして|そして時代にそぐわないものとして］|；彼は要求した|アナーキーを、|人々が力をもつことを|そして国際主義を|書かれた言語の中へ。彼によれば|それは変わらなければならなかった|下から上へ向けて|そして得る|また外部の影響を。

◎意訳

Saarikoski は、教養層の言語使用にもとづく共通語というものが非民主的で、時代にそぐわないものだとみなす中で、その時代の考え方を集大成したといえる；彼は書き言葉の中に、アナーキーであること、つまり、上からの支配を受けるものでないこと、人々が力をもつこと、そして国際性というものを要求した。彼によれば、共通語は下から上へ向けて変化しなければならないのであり、また外部からの影響を受け入れなければならないのであった。

【32】大学教授や大臣のどこが偉いのか!!

Saarikoski vaati ohjelmassaan lyriikalta kielellistä tasa-arvoa. ”Ministerin tai professorin sanat ja lauseet eivät ole arvokkaampia kuin ministerin autonkuljettajan tai professorin kotiapulaisen sanat ja lauseet”, runoilija väitti […] kokoelmassaan *Kuljen missä kuljen* (1965).

■語句・文法

ohjelmassaan「自らのプログラムの中で」［内］+ 単 3 所接 < ohjelma／lyriikka「叙情詩」／arvokkaampia「より価値の高い」複分 < arvokkaampi 比 < arvokas < arvo／auton-kuljettaja「自動車の運転手」（kuljettaja < kuljettaa < kulkea）／koti-apulainen「お手伝いさん」／kokoelmassaan「自らの詩集の中で」［内］+ 単 3 所接 < kokoelma < koota

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski は要求した|自らのプログラムの中で|叙情詩に対して|言語的な平等を。「大臣や教授の単語や文の方が価値が高いのではない|大臣の運転手や教授のお手伝いさんの単語や文よりも」、|詩人は主張した［...］自らの詩集の中で|『私は私が行くところを行く』（1965 年）。

◎意訳

Saarikoski は自らの作家活動における計画の中で、叙情詩に言語的な平等を要求した。「大臣の、

あるいは大学教授の使う単語や文が、大臣の運転手や大学教授のお手伝いさんが使う単語や文よりも価値があるわけではない」と詩人である Saarikoski は［. . . ］自らの詩集 *Kuljen missä kuljen*『私は私が行くところを行く』（1965 年）の中で主張した。

【33】言葉と向き合うこと、それが Saarikoski の人生の仕事

Saarikoski otti elämäntehtäväkseen suhteen kieleen, maailman ja kielen suhteen. Hän opiskeli kieliä, koska yhtä kieltä katsoo terävämmin toisten kautta. Hän eli ihmisten joukossa, yhteiskunnallisesti välillä hyvinkin aktiivisena, koska maailman tutkiminen on välttämätöntä kielen tutkijalle. Hän jätti kuitenkin politiikan, koska ei pitänyt sitä omana tehtävänään.

■語句・文法

elämän-tehtäväkseen「人生の仕事として」［変］+単 3 所接 < -tehtävä／terävämmin「より鋭く」［副］比 < terävä < terä／toisten kautta「別の諸言語を通して」／välillä「ときに」［接］< väli／välttämätön「不可欠な、不可避な」< välttää／omana tehtävänään「自らの役割だと」（tehtävänään［様］+ 単 3 所接 < tehtävä 受現分 < tehdä）

●フィンランド語理解のための訳例

Saarikoski は自らの人生の仕事とした｜言語との関係を、世界と言語との関係を。彼は諸言語を学んだ、｜なぜなら、ある一つの言語はより鋭く見えるから｜別の言語を通して。［彼は生きた｜人々の中で、｜社会的にときにはとても積極的に、］｜なぜなら世界を研究することは不可欠だったから｜言語を研究する者にとっては。彼はしかしながら政治は捨てた、｜なぜなら、それを自らの役割だとは考えなかったら。

◎意訳

Saarikoski は言語との関係を、そして世界と言語との関係を自らの人生の仕事とした。彼はさまざまな言語を学んだ。なぜなら、ある一つの言語は別の言語を通してこそより鋭く見ることができるからである。彼は人々の間で、社会的にはときに非常に積極的に生きた。なぜなら世界について研究することが言語を研究する者には不可欠なことだったからである。しかしながら彼は政治から離れていった。なぜなら政治が自分自身の役割だとは思わなかったからである。

【34】現実は言語を通してしか存在しない!!

Hänen tehtävänsä oli ajatella ja kirjoittaa, yrittää nähdä. Yhden ongelman pohtiminen näytti monta uutta. Selvyyden sijaan löytyikin paradokseja. Mikään ei ollutkaan joko – tai, mutta ei myöskään sekä – että. Kieli piti synnyttää yhä uudestaan, kaikkine tasoineen, kaikkine taustoineen. Ja kuitenkin kieli oli vain elämän kanssa puhumisen väline, ihmisten ymmärtämisen väline, viime kädessä itsensä löytämisen väline, oman itsen, joka ei tuntunut todelliselta kuin kielen kautta.

■語句・文法

pohtiminen「熟慮すること」動名 ＜pohtia／selvyys「明快さ」＜selvä／paradokseja「逆説、パラドックス」［複分］＜paradoksi／joko ~ tai…「～か…かどちらか」／sekä ~ että …「～と…と両方」／kieli piti synnyttää「言語を生み出さなければならなかった」（kieli は synnyttää の主語ではなく目的語）／uudestaan「あらためて、新たに」／kaikkine［共］＜kaikki／tasoineen［共］+ 単 3 所接 ＜taso「レベル」／taustoineen 共+単 3 所接 ＜tausta「背景」／viime kädessä「最終的には」／itsensä「自信の」［属］+ 単 3 所接＜itse／oma itse「本来の自分」／ei tuntunut todelliselta「現実のものだと感じられなかった」（tuntua +［奪］「～のように感じられる」）

●フィンランド語理解のための訳例

彼の仕事は考え、書き、見ようとすることだった。一つの問題を考えることは見せてくれた｜多くの新しい〈問題〉を。明確さの代わりに見つかった｜パラドックスが。何も「A か B か」ではなく、しかしまた「A も B も」でもなかった。言葉は生み出さなければならなかった｜常に新たに、｜あらゆるレベルとともに｜あらゆる背景とともに。そして、［それでも言語はただ人生と対話するための手段だった、｜人間を理解するための手段、｜究極的には自分自身を発見するための手段｜本当の自分自身を、］｜それは現実のものとは感じられなかった、｜言語を通して以外では。

◎意訳

Saarikoski の仕事は考え、そして書き、見ようとすることだった。一つの問題について考えることは多くの新しい問題を見せてくれた。明確さの代わりにパラドックスが見つかることもあった。いかなることも「A か B かのどちらか」ではなかったし、かといってまた「A も B も両方とも」でもなかった。言語はあらゆるレベルや、あらゆる背景を含め、繰り返し生み出さなければならないものだった。しかし、言語はただ人生と語り合う道具にすぎず、人間を理解するための道具であり、最終的には自らを発見する道具に過ぎないのであった。言語を通じてしか現実のものとは感じられないような本来の自分自身を見つけるための道具だったのである。

★補足

それでは次の【35】の Saarikoski 自身の言葉で、この資料は終わりにしましょう。その【35】は Mia Berner（1923-2009）というノルウェーの作家が書いた作品 *PS: merkintöjä suruvuodelta*『PS：喪に服した一年の記録』（1986 年）から Leena Kytömäki さんが論文の中で引用しているものを、そのまま使わせていただきます（Kytömäki さんの文献については、「◆出典」で確認してください）。Mia Berner さんは 1975 年から 1983 年まで Pentti Saarikoski と結婚生活を送っていましたが、1983 年に Saarikoski はなくなっています。作品名の中にある「PS」は Pentti Saarikoski の頭文字だと思います（私自身はこの作品を見たことはありません）。それでは、Saarikoski の言葉で締めくくりましょう。

【35】「フィンランド語は私の皮膚」だと Saarikoski はいう

Suomen kieli
on minulle ikkuna ja talo
minä asun tässä kielessä
Se on minun ihoni

◎意訳

フィンランド語は
私にとって窓であり家である
私はこの言葉の中に住んでいる
それは私の皮膚である

＊＊＊

◆出典

【1】【2】【3】【6】:

Laitinen, Kai. 1981. *Suomen kirjallisuuden historia.* Otava.

【1】【2】【3】570 ページ、【6】578 ページ

【4】【5】【7】:

Johansson, Urho, Leena Kirstinä, Irmeli Panhelainen & Anneli Vähäpassi. 1989. *Kieli ja kirjallisuus III.* Kirjayhtymä.

【4】【5】337 ページ、【7】337-338 ページ

【8】【9】【11】【12】【13】【29】【30】【31】:

Saarelainen, Juhana. 2016. ”Puhuuko Suomi suomea?”. Kaartinen, Marjo, Hannu Salmi & Marja Tuominen (toim.). *Maamme: Itsenäinen Suomen kulttuurihistoria.* Suomelaisen Kirjallisuuden Seura. 415-436.

【8】415-416 ページ、【9】416 ページ、【11】419 ページ、【12】416 ページ、【13】417 ページ、【29】416 ページ、【30】417 ページ、【31】419 ページ

【10】【33】【34】【35】:

Kytömäki, Leena. 1987. ”Kieleen muuttanut ihminen: Pentti Saarikosken suhde kieleen”. *Sananjalka* 29. 85-112. < https://journal.fi/sananjalka/issue/view/5956>

【10】85 ページ、【33】【34】109 ページ、【35】105 ページ

【14】【15】【16】【18】【19】【20】【21】:

Arminen, Ilkka. 1999. ”Kirjasodat”. Pertti Lassila（toim.）. *Suomen kirjallisuushistoria 3: Rintamakirjeistä tietoverkkoihin.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura. 220-226.

【14】【15】220 ページ、【16】【18】222 ページ、【19】【20】223 ページ、【21】220 ページ

【17】:

Kirstinä, Leena. 2000. *Kirjallisuutemme lyhyt historia.* Tammi.

【17】194-195 ページ.

【22】【23】:

Ekholm, Kai. ”Beat, sperma ja jumalanpilkka”. *Tiellä sananvapauteen.* <https://sananvapauteen.fi/artikkeli/2198>

【24】【25】【26】【27】:

Riku, Neuvonen. ”Epäsiveellisten julkaisujen levittäminen rikoksena”. *Tiellä sananvapauteen.* <https://sananvapauteen.fi/artikkeli/890>

【28】:

Tarkka, Pekka. 1996. *pentti saarikoski: vuodet 1937-1963*. Otava.

【28】431-432 ページ.

【32】:

Niemi, Juhani. 1999. ”Draaman kautta vallankumoukseen?” Pertti Lassila（toim.）. *Suomen kirjallisuushistoria 3: Rintamakirjeistä tietoverkkoihin.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura. 172-186.

【32】175 ページ。

****
蛇足

　サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』のフィンランド語訳は 2 種類出版されています。

📖J. D. Salinger. (Suomentanut Pentti Saarikoski). 1961. *Sieppari ruispellossa*. Tammi.
📖J. D. Salinger. (Suomentanut Arto Schroderus). 2004. *Sieppari ruispellossa*. Tammi.

　日本語版も、やはり 2 種類出版されています。

📖J.D.サリンジャー（野崎孝　訳）. 1984. 『ライ麦畑でつかまえて』. 白水社.
📖J.D.サリンジャー（村上春樹　訳）. 2006. 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』. 白水社.

　これらに英語版も含め比較対照しながら研究するのも興味深いと思いますが、私にはその力はありませんので、どなたかお願いします。

　さて、Pentti Saarikoski についての資料でしたが、結局のところ「フィンランド語」というものに何を求めようとするのかという問題について考えたことになります。同じように「日本語」とは何かについて考えるべきでしょう。そして、とくに作家の方々は日々「日本語」とは何かを自分自身に問いかけながら、作品と向き合っているのだろうと思います。そんな中で、よく耳にする「正しい日本語」といった表現には吐き気を催すようになってください。誰が「正しい日本語」を決定する力をもつのか、その力はどこから手に入れるのか。そういう問いかけをしていくと、言語が権力の問題になるということがよくわかるかもしれません。
　「正しい日本語」を主張する典型的な人々が大学の教員です。学生に向って「正しい日本語を書きなさい」と毎日のように説教しているのですから、もちろん大学の教員は「権力者」だということになるでしょう。そういう権力者である大学の教員が「正しい日本語を使え」という一方で、どうしてあんなにもカタカナ言葉が好きなのか不思議でなりません。そんな権力者であり「正しい日本語」を定義する資格をもつ大学教員が好む言葉の中で、もっとも感動的なものが「ダイバーシティ」という言葉でしょう。たとえば、私の母親に「ダイバーシティがね……」などと言っても、キョトンとするだけです。つまり、このような語を使うということは、私の母親のような人間をその場から「排除」しているということを意味します。まあ、私の母親など社会から排除しても誰も困りはしないでしょうから、どんどん「ダイバーシティ」といった言葉を使って高尚な話をしていきましょう。それが大学教員というものですから（といっても、私はもう大学教員ではありませんので、そうする資格もありませんが）。
　そういえば私の母親のような人たちを「排除」しようとする「ダイバーシティ」ってどういう意味でしたっけ。